

境界線をめぐる政治と辺境統治性 植民地期のケニア北東部におけるソマリの事例*

楠 和 樹

Boundary Negotiation and the Frontier Governmentality in Colonial Northeastern Kenya

KUSUNOKI, Kazuki

Historians of nomadic societies in East Africa have emphasized their high mobility as the core of the pastoral mode of subsistence. It has long been supposed that borders were procedures for containing this mode of subsistence and making such societies amenable to administration. However, recent scholars have approached the issue from a different angle. They insist that borders are arbitrary institutions that have been imposed regardless of the disposition of cultural areas. For them, the drawing of boundaries can be approached as a process in which a variety of actors negotiate with each other, produce meanings, and create profitable opportunities. On the basis of this methodological perspective, this study explores the political impact of boundaries drawn by the colonial state in northeastern Kenya on the Somali pastoralists.

This study is distinctive in that it investigates administrative boundaries instead of international borders. To date, scholarly attention has been mainly devoted to the latter. However, this does not mean that administrative boundaries have less significance; internal borders offer a better opportunity to reflect on the specific meaning of statehood, especially in the case of peripheral borderlands. By examining how the government territorialized a specific sub-clan of Somalis and how the latter engaged with such territorialization, this study provides a nuanced understanding of colonial rule in the frontier region of northeastern Kenya. It argues that the porous boundaries were consequences not of the restrictive nature of state rule but of a specific kind of governmentality in a frontier region where administrative

Keywords: colonialism, boundary, pastoralism, frontier, mobility

キーワード: 植民地主義, 境界線, 牧畜, 辺境, 移動性

* 謝辞

本稿は、科学研究費補助金・基盤研究 B「牧畜社会におけるエスニシティとエコロジーの相関」の第 8 回研究会（2020 年 6 月）と、日本アフリカ学会第 58 回学術大会（2021 年 5 月）でおこなった発表をもとにしています。池谷和信氏（国立民族学博物館）、佐川徹氏（慶応義塾大学）、シンジルト氏（熊本大学）など、これらの発表や本稿の原稿に有益なコメントをしていただいた方々に感謝申し上げます。また、ケレン・ウェイツヴァーグ氏（ロンドン大学）には新型コロナウイルスの流行が続き、史料調査が困難な状況下で必要な資料の一部を提供していただきました。ありがとうございました。



and judicial powers were concentrated in the hands of local officials. Furthermore, the Somali sub-clan, whose collective identity was anchored by the setting of these boundaries, struggled to utilize them for a politics of authority and territoriality.

- 1 はじめに
 - 1.1 研究の背景
 - 1.2 地域の概要
 - 1.3 構成
- 2 ケニア北東部の牧畜化
 - 2.1 先史時代から 15 世紀まで
 - 2.2 オロモのヘゲモニー
- 3 19 世紀のソマリの移動
 - 3.1 ソマリ史における移動
 - 3.2 ジュバ川を渡る
 - 3.3 植民地化とケニアへの移住
- 4 アウリハンの移動と領域化
 - 4.1 移動
 - 4.2 植民地支配の拡張と南北アウリハンの分裂
 - 4.3 北東部における領域化
- 5 多孔的な境界線
 - 5.1 領域化の失敗
 - 5.2 間接統治
 - 5.3 ヘールとしての境界線
- 6 結論

1 はじめに

1.1 研究の背景

植民地期にケニア北東部に引かれた境界線は、牧畜民にどのような影響を与えたのだろうか（図1）。境界線をめぐってこの地域ではいかなる種類の統治がどのように展開されたのだろうか。本稿で検討されるのは、以上のような問いである。

ここで言うケニア北東部とは、現在の行政区分としてはマンデラ、ワジア、そしてガリッサの3つのカウンティに当たる。また、地理的にはリフトバレーのトゥルカナ湖からインド洋に向けて東に広がっている低地帯に含まれる。その地形は、丘陵が点在している北縁部を除いて平地によって占められており、北に向けてなだらかに標高が高くなっている。

ケニア北東部は全体的に気温が高く、乾燥している。この地域には年に2度の雨季が訪れるが、全体的に雨量は乏しく、また降雨のパターンも年によって大きく変動する。年間を通して利用可能な永久河川は、北東部のそれぞれ北と南西の境界線をなしているダウ

川とタナ川に限られる。ただし、北部から中部にかけて降雨時のみ水が流れる間欠河川が毛細血管のように通っており、その河床に掘られる井戸からも取水が可能である（写真1）。また、降雨後に一定期間形成される溜池も、人間を含むこの地域の生き物の生存を支える貴重な水資源である。植生としては低木類によって地表がまだらに被われているに過ぎず、アカシアなどの高木はこれらの河川沿いでしか見られない（Swarzenski and Mundorff 1977, 写真2）。

ケニア北東部を含む東アフリカの乾燥・半乾燥地域では、長きにわたって牧畜が営まれてきた。この地域に暮らす人々にとって家畜は不可欠な生存のパートナーであり、彼らはローカルな生態条件に応じてウシ、ラクダ、ヤギ、ヒツジという4つの種類の家畜から畜群を編成することで、厳しい環境を利用可能な空間へと転換してきた。彼らの生活は、その他の生業集団と比較すると移動性の高さによって特徴づけることができる。つまり、彼らは季節の変化と家畜のニーズに合わせて、小規模な集団単位で水場と放牧地を求めて広



写真1 間欠河川
出典：筆者撮影



写真2 低木地の風景
出典：筆者撮影

い範囲を移動しつづける必要があったのである。さらに、高い移動性には物理的な側面だけでなく社会的な側面もあった。たとえば、19世紀のトゥルカナ湖畔ではレンディーレ、サンプル、ダサネッチという牧畜民が流動的な関係を維持していたことが知られている(Sobania 1980)。それらの民族間では生業、言語、文化の差異を越えた個人レベルの友人関係が構築されており、日常的に贈与物を交換したり、互いの地域の情報を共有したりしていた。彼らが旱魃や感染症の流行などで家畜を失って困窮した場合、友人を頼って他民族のもとに避難民として身を寄せるのは珍しいことではなかった。また、レンディーレ、サンプル、ダサネッチのうち前二者は文化的、生態的なニーズを相互に補うことで共生関係を深めていった。その結果、アリアルという民族的なアイデンティティが新たに出現するに至った(Spencer 1973)。このような集団間の高い移動性と流動性はトゥルカナ湖畔に限らず、東アフリカの乾燥・半乾燥地域で広く見られた(Berntsen 1979; Helander 2003; Waller 1985)。

東アフリカの乾燥・半乾燥地域で牧畜民の調査に取り組んできた研究者らは、彼らが19世紀以降直面してきた長期的な変化についておおむね悲観的な見立てを示してきた(Fratkin 1991; Schlee 1989; Waller 2012)。文化人類学者のアビंक(Abbink 1997)が牧畜民の「文化的、政治的空間の縮減」と呼ぶこのプロセスのなかで、牧畜民は近代国家と資本に従属し、政治経済的に周縁化され、文化的な伝統を失っていったとされる。そして、国家が主権領域の内外に定める境界線はこのプロセスで決定的な意味を持つ制度として位置づけられる。ガラティによると、境界線とは「空間的、社会的リアリティとそれに関する理解をかたちづくる、権力と知のテクノロジー」(Galaty 2016: 98)であり、そもそもリニアな境界線概念になじまない牧畜民を空間的に固定し、「読解可能

(legible)」(Scott 1998)な状態に置くことによって効率的な管理を可能にする。このとき、牧畜という生業様式の根幹をなす移動性はローカルな社会的、生態的な条件とは無関係な論理と力によって左右されることになる。彼らの遊牧の季節的なサイクルは妨げられ、限られた放牧資源をめぐって集団間の衝突は激しさを増していく。また、民族ごとにテリトリーが物理的に区切られることでその狭間の流動性が失われ、トゥルカナ湖畔で見られたような民族を横断する紐帯は維持できなくなる(Schlee 2010)。それは、旱魃などの有事に頼ることができるセーフティーネットを社会の外部に持てないことを意味していた(Sobania 1980)。

以上の議論については、これまでおもに2つの方向から批判が投げかけられている。まず、牧畜民の境界線の犠牲者としての側面が強調される反面、その政治的エージェンシーが過小評価されているという議論がある。境界線がモビリティの範囲を狭めたのは事実であり、特定のエスニシティとテリトリーは結びつきを強めることで、生態的、政治的な資源をめぐって対立する権利主張に拍車をかけ、地域紛争の一因となっている(内藤 2010)。しかし、それによって民族間の関係が完全に分断されたわけではなく、ときに敵対する集団間にも共生の実践が見られることは、各地から報告されている(河合 2004; 佐川 2009)。また、そもそもすべての牧畜民が一律に境界線に拒否反応を示したというのも一種のステレオタイプの踏襲であり、在来の境界線概念をもとに国家の領域支配に対抗したケースがあったことも指摘されている(Cormack 2016)。

受動的なアクターの想定は近代国家の権力性に関する議論とコインの裏表の関係にあり、もうひとつの批判はこの点にかかわっている。境界線の問題を初期に取り上げたのは政治史の研究者だが、彼らの関心は1884年から翌年にかけて開催されたベルリン会議な

ど国家レベルの政治的、外交的なプロセスにあった。そのため、アフリカ人のローカルな視点が取り上げられることはなかった。この点で画期的だったのが、イバダン大学の歴史学者アシワジュらの研究である (Asiwaju 1985)。彼らのアプローチは境界線によって分割された人々の経験を分析の中心に据えたことによって、この分野のその後の研究の方向性を大きく変えたと評価されている。他方で、1990年代に入ってそれまで批判的に検討されてこなかった植民地国家像が見直され、その内部の複雑性、二律背反性、有限性が掘り下げられると (Berry 1992)、この議論が国家／社会の硬直した二元論を暗黙のうちに前提としていること、そして境界線について論じる際に両者の分析を切り離していることが問題として指摘されるようになった。これを受けて、近年の研究では国家権力の全能性と絶対性を所与とすることなく、それが境界地域を構成するひとつのアクターとして地域住民や商人などほかのアクターと交渉し、協同し、折衝しながら境界線を意味付け、政治的、経済的な機会を生み出している局面に注目している (Nugent 2002; Vaughan 2013)。

本稿では、以上のような東アフリカの牧畜民研究と境界史研究における議論の動向を踏まえながら、以下の3つの方針に沿ってケニア北東部の境界線政治を検討する。第一に、境界線を牧畜民の「空間の縮減」をターゲットとした制度ではなく、国家が特定の仕方で現れる場として捉える (Vaughan, Schomerus, and de Vries 2013)。そのため、本稿では境界線の設定と管理に関する植民地行政資料とともに、それらの出来事に関する口述資料にも依拠する。改めて強調するまでもなく、口述資料を用いたオーラル・ヒストリーはアフリカ史で黎明期から用いられてきた歴史叙述の手法である。ただし、当初はその目的が植民地化以前から持続してきたネーションの伝統を再構築することにあつたのに

対して、近年のアフリカ史では植民地期への関心の集中とともに口述資料と文字資料の関係が問題となり、その史料的な意義も問い直されている (White, Miesher, and Cohen 2001)。本稿でもこの点を意識しながら、聞き取り調査から得られた語りの内容を書かれたものの単なる補完物ではなく、文字資料とは異なる道筋から地域境界史にアプローチする手がかりとして捉える立場をとる。

第二に、この地域に特有の国家のあり方に光を当てるために、本稿では南アジア史研究者のホプキンスの所論に依拠する (Hopkins 2020)。ケニア北東部に限らずインド北東部、パキスタン北西部、パレスチナ南部など、現在地球上で辺境 (フロンティア) と呼ばれている地域の一部にはイギリスの旧植民地という共通項がある。彼によると、これらの地域はある種の地理的条件を満たす場というより、概念的な構築物として捉えることができるという。すなわち、それらはもともと辺境として眼差されてきたわけではなく、19世紀後半からイギリス帝国の支配圏で広く取り組まれた特定の統治実践を通じて辺境空間へと成型されたのだ。それらの諸実践が最初に試行されたのは、インド帝国の北西辺境州である。帝国政府はこの山岳地帯に暮らす移動性の高いパシュトゥンを支配下に置くために、辺境犯罪法など一連の法的、行政的な手段を導入した。この戦略が一定の成功を収めたことから、イギリスが世界各地で対応に苦慮していたバローチやベドウィンなどの「野蛮」な民族に対しても流用された。以下で述べるように、ケニア北東部のソマリ対策もそのひとつである。このように、辺境をターゲットとして地域横断的かつ帝国規模で編み出された統治理性を、ホプキンスは「辺境統治性」と呼んでいる。本稿ではこの議論を援用しながら、境界線をめぐって辺境統治がどのように展開されたのかを問う。

そして第三に、本稿では国家間の境界線ではなく国内の行政境界線をおもな分析の対象

とする。国境は異なる主権と経済圏の狭間からリスクとリソースが生じる興味深い対象であり、先行研究の多くはこちらを扱ってきた¹⁾。とはいえ、だからといって国内の境界線に歴史的な検討の意義が小さいわけではない。というのも、国家はつねに主権領域の内側よりもその外縁をなす境界線の管理に注力していたわけではなく、実際にはその逆のケースもしばしば見られたからである。特定の地域を事例に境界線の設定と管理、その背後にあった統治の論理、そしてそれが招来したローカルな政治を詳細に検討することによって、領域性をめぐる辺境統治の複雑さの一端に光を当てることができるのではないかと考えられる。

1.2 地域の概要

本稿の舞台は、現在のケニア共和国北東部のガリッサ・カウンティに当たる地域である(図2)。第4章で述べるように、この地域はケニアの植民地化とともにタナリバー県の一部として地方行政に組み込まれた。その後、現在のガリッサ・カウンティに地理的に相当する領域がタナリバーから切り離され、テレムガー県が新設された。1920年のことである。1931年には、当初サンクリに置かれていた県庁がガリッサに移転し、それともない県名もガリッサ県に改称した。この行政区画は、現在までほぼそのまま引き継がれている。

ケニア北東部のほかの地域と同様に、ガリッサの大半は山岳部や丘陵地に乏しい低地帯からなる。気候的には乾燥・半乾燥地に分類される環境であり、平均気温は36度と高い。全体の年間平均降水量は275ミリメートルだが地域的なばらつきも大きく、おおまかには北側から南側にかけて降雨量は多く、乾燥度は低くなる(Pratt, Greenway, and Gwynne 1966)。

ガリッサ・カウンティの生態環境のうち

もっとも重要なのが、それぞれ南側と北側の境界線をなしているタナ川とエワソ・ニコ川水系である。タナ川の流域は唯一の農耕適地であり、古くからモロコシなどの穀物や野菜が栽培されてきた。他方で、県内のその他の地域の大半では水資源へのアクセスが限られており、砂質土壌で侵食性が高いために農業は困難である。しかし、低木類や草地在り優先するその環境は家畜の採食に適していることから、現在にいたるまで牧畜が主要な生業となっている。彼らに貴重な給水手段を提供してきたのが、北部を多数走っている間欠河川である。これらの河川は雨期の限られた期間しか水が流れないものの、牧畜民は流水後に形成される溜池や地下水を利用することができた。間欠河川のなかでもとくに重要なのが、エワソ・ニコ川水系である(写真3)。ケニア山とアバーデア山脈を水源とし、ライキピア平原を通して東に流れているこの河川は、メルティ付近で氾濫し、豊富な地下水を有するメルティ帯水層へと流れ込んでいる(Swarzenski and Mundorff 1977)。その地表部に形成されるロリアン湿地は乾期のあいだも利用可能な水場と放牧地を家畜にもたらし、キリンやゾウなどの野生動物を引き付けてきた。また、この湿地を水源とする間欠河川のラグデラ川は流路を東にとって現在のソマリアの下ジュバ地方に流れ込み、豊かな水場と放牧地を用意してきた。

民族的に見ると、現在のガリッサ・カウンティの人口の大半はソマリアの人々によって占められている。ソマリアのほとんどはイスラームを信仰しており、その言語は東クシ系に分類される。彼らはアフリカ大陸の北東端からインド洋に突き出した「アフリカの角」をおもな居住域としており、ケニア以外にもソマリア、エチオピア、ジブチでその姿が見られる。また、経済的、政治的な理由からアフリカを離れたディアスポラも多く、アデン湾を

1) 例外として Johnson 1982。



写真3 エワソ・ニロ川

出典：筆者撮影



写真4 ジュバ川と、カヌーで渡渉するソマリ（1910年頃）

出典：BA/2005/078/1/119

はさんで向かい合うアラビア半島はもちろん、ヨーロッパや北米の一部の都市でコミュニティが形成されている (Besteman 2016)。ケニアではソマリの大半はガリッサを含む北東部に集中しており、2009年に実施された国勢調査では240万人がカウントされた。これはケニアの民族のうち6番目に多い数字である。また、彼らのテリトリーはサブクランごとに大まかに分かれており、ガリッサの場合はもっとも乾燥した北側にアウリハン、ガリッサ市周辺の中心部にアブドワク、そして比較的雨量が多い南側にアブダラーがそれぞれ分布している²⁾。

このように現在ではケニアの主要な民族のひとつとして数えられているソマリだが、この国に定着したのは比較的最近になってからである。次の章で述べるように、ソマリは歴史的に近代国家の領域区分を前提とすれば驚くほど広い範囲を、ラクダを中心とした家畜群とともに移動して暮らしてきた。彼らがケニアへと流れ込んだのは19世紀末以降のことである。

彼らの移動はおもにサブクランを基本的な単位としており、前述のアウリハン、アブドワク、アブダラーの3つの集団もこの時期にガリッサに定着している。イギリスが北東部まで植民地支配の網の目を広げたのもやはり同じ時期のことであり、現場の行政官は民族やクランごとに境界線を設定し、彼らの移動性をコントロールすることを最優先課題のひ

とつに据えていた。しかし、あらかじめ議論を先取りするとそれらの境界線は早々に有名無実化したばかりか、少なくとも第二次世界大戦後になるまでその状態は続くことになった³⁾。それでは、このように管理に失敗した境界線は植民地政府にとって何を意味していたのだろうか。また、その他の牧畜民と同様にソマリにとっても境界線はそれまでにない経験だった。では、彼らにとって多孔的な境界線はどのような意味を持ったのだろうか。それが容易に無視できる存在に留まらなかったのだとすれば、いったい何だったのだろうか。本稿ではガリッサの3つのサブクランのうち北部のアウリハンのサブクランを事例として、これらの点を掘り下げて検討する。

1.3 構成

本稿の分析の対象となった植民地行政文書は、筆者が2013年からおこなっているケニア国立公文書館等での調査中に断続的に入手したものである。また、口述資料は2010年9月から2011年2月にかけてアウリハンの中心地であるモドガシ市を中心にフィールドワークをおこなった際に、聞き取り調査によって収集した⁴⁾。

以下の本稿の内容は、結論を含む5つの章によって構成される。本稿の主眼は境界線をめぐる植民地政治にあるものの、最初の2つの章では先史時代以降のソマリをはじめとする牧畜民の移動のプロセスを整理する。とい

-
- 2) 「サブクラン」という用語をふくめて、ソマリの社会構造については第3節でまとめて説明する。
 - 3) 計画的な放牧地管理が導入され、政府の境界線管理も強化される第二次世界大戦以降の時期は、本稿で扱う期間とは異なる局面に突入するためここでは取り上げない。大戦後の期間については、間帝國的な第二次世界大戦後の植民地開発のイニシアティブ (Hodge, Hödl, and Kopf 2014) や、環境保護主義の科学知、制度との結びつき (水野 2019) が重要な論点となる。
 - 4) フィールドワーク中、筆者はこの調査テーマを主眼として位置づけていなかった。ただし、アウリハンの移住と定住化の歴史の概要を把握する必要があると考えたため、スルターン (後述) 経験者を含む、比較的社会的地位が高く歴史に詳しいとされる何人かの年長男性を対象を絞ってインタビューをおこなった。調査対象に関するこの偏りは本稿の議論に限界をもたらしているが、同時に、フィールドの社会的な構造によって方向づけられたという側面もある。とくに、これまでソマリ研究者が直面してきたように (Weitzberg 2017: 15–16)、年長男性に歴史的な語りの権威が置かれる社会で女性の声にアクセスするのは現実的に困難であった。以下の分析が対象社会の多声性を十分に反映したものではないという点は、あらかじめ指摘しておきたい。

うのも、ソマリの移動性の意義はケニア北東部における生業牧畜の確立と伝播の長期的な歴史の文脈において理解できるからである。第2章では、この地域で先史時代から19世紀までに牧畜民が拡散し、生業、言語、文化の異なる集団とのあいだに関係を構築する過程を簡潔にまとめる。次の第3章では、19世紀に始まるソマリの集団的な移住の経過と、その政治的、経済的、宗教的な背景を概観する。アウリハンを事例に移動と領域化—国家が地理的空間を領域として画定すること—をめぐる植民地政治を検討したが、次の2つの章である。第4章では、彼らがもっていたエチオピア南縁部を離れ、最終的に現在のガリッサ・カウンティ北部に定着するまでをたどる。さらに第5章は、北東部の行政当局が多孔的な境界線の問題にどのように対処を試みたのか、そしてそれがアウリハンにとって何を意味する事態だったのかを考察する。最後の章では本稿全体の議論をまとめ、その多孔性を統治の不徹底や失敗と捉えるのではなく、辺境統治性の視点から考察する。

2 ケニア北東部の牧畜化

ケニア北東部では人々が文字によって記録を残してこなかった。そのため、この地域の植民地化以前の歴史を再構成するためには口頭伝承の歴史学的な研究に限らず、歴史言語学、考古学、遺伝学の分野から得られる知見が重要な手がかりとなる。

2.1 先史時代から15世紀まで

現在の考古学的、遺伝学的な研究によると、アフリカにおける家畜利用の歴史は作物栽培よりも古いという理解が共有されている。およそ8000年前までにはアフリカ北東部の東サハラで牧畜が発展していたことが判明している (Marshall and Hildebrand 2002)。最初期の牧畜民はまざウシの馴化に成功し、やがてヤギ、ヒツジ、ロバも群に加えていった。

それらの家畜はその後、おそらく完新世中期の気候変動を受けてサハラ以南のほかの地域に伝播していった。すなわち、およそ6000年前から5000年前の温暖期にサハラ全体が乾燥化したことによって、人々は家畜とともにサヘルなどより良い環境を求めて移住したのである。ケニアで牧畜が始まったのも同様の背景があり、スーダンとエチオピアから南下してきた南クシ祖語の集団が最初に家畜をもたらしたと考えられている (Ehret 1974: 7-31)。

現在までに確認されているケニアでもっとも古い牧畜の痕跡は、トゥルカナ湖東岸のドンゴディエンからの出土品である。ここではウシ、ヤギ、ヒツジの骨と歯が発掘されており、およそ4000年前のものと思われる。また、このサイトからは野生動物や魚の骨も見つかっていることから、彼らは牧畜と狩猟、漁撈の複合的な生業を営んでいたと推測される。その後、およそ3500年前から2000年前まで再び湿潤期に入ると、牧畜民はトゥルカナ湖を離れて拡散していったという。彼らはリフトバレーを中心的な回廊としてケニア北部から他地域に広がり、その一部はタンザニア北部まで到達した。また、彼らはその過程でケニア北部とは異なる移住先の多様な環境に合わせて生業戦略と文化を適応させながら、生業と言語の異なる先住民とのあいだで相互的な影響を深めていった (Lane 2011)。

では、以上のような広域的な牧畜の伝播のプロセスにおいて、トゥルカナ湖とリフトバレーよりもさらに東側に広がるケニア北東部の乾燥・半乾燥地はどのように位置づけられるのだろうか。残念ながら、北東部では現在までに考古学的な調査がほとんどおこなわれておらず、その知見を活用できる範囲が限られている。ただし、モヤレの南西に位置するエレボルでは1970年代から発掘調査が続けられており、興味深い報告をもたらしている。動物考古学者のギフォード＝ゴンザレスはこの調査から、トゥルカナ湖周辺で牧畜が

始まったあともこの地域では生業の転換が起こらず、採集活動が継続していたことを示唆している (Gifford-Gonzalez 2003)。この報告は、ケニア北東部の歴史的な展開がその西側から切り離されており、限定的な水資源が家畜飼育の導入を阻害する要因となった可能性を示している。

他方で、歴史言語学的な研究ではケニア北東部への牧畜の進出が東オモ・タナ祖語の言語集団の分化のプロセスと関連していたという解釈が支持されている (Fleming 1964; Heine 1978; Lewis 1966)。東オモ・タナ祖語とは低地東クシ諸語のひとつであり、現在話されているレンディーレ語、ソマリ語、バイソ語の共通の祖先言語とされる。アフリカの角で言語の比較調査をおこなったアリとエレットによると、もともと東オモ・タナ祖語の話者集団はジュバ川の上流域をテリトリーとしていたという。彼らはここでモロコシ、オオムギなどの穀物を栽培し、ウシ、ヤギ、ヒツジを飼育するなど、複合的な生業を営んでいたのである (Ali 1985; Ehret 1995)。その後、この集団は紀元前一千年紀の前半に2つに分かれ、そのうちの一方が低地で乾燥したダワ川流域へと進出し、その過程で生業戦略における牧畜への比重を強めていった。彼らが紀元前一千年紀末にさらに分化した結果生じたのが、レンディーレとソマリの祖先に当たる集団である。このうち前者はトゥルカナ湖の東側とエチオピア高原の南縁部に挟まれた地域に留まり、農耕とウシを中心とした牧畜を継続した。それに対して、後者のソマリ祖語の集団はジュバ川とシェベレ川のあいだの雨量が豊富な一帯へと移住していった。彼らは移住先で農耕や狩猟採集を営む先住民と混淆する一方で、それらの人々がほとんど

利用していなかった環境を放牧資源として活用しつつ、テリトリーを拡大していった。彼らは3世紀頃までに段階的な分化を続け、チュニ、ガレー、マーイ、マハーなど現在話されている方言集団の分布を形成していった。

このように東オモ・タナ祖語の話者集団が分化と移住を重ねながらアフリカの角の南東部で牧畜を広めていったと見られるものの、ケニア北東部を含む乾燥した環境に彼らが進出するためにはラクダという乾燥地に適応した家畜の導入を待たなければならなかった。ラクダ牧畜の歴史はウシやヤギなどほかの主要な家畜よりも浅く、3000年前にアラビア半島で始まったと考えられている。ラクダがどのような経路でアフリカの角に導入されたのかについては議論が分かれているが、西インド洋のソコトラ島に岩絵などの遺跡が残っていることからエジプトを経由した陸路ではなく、アデン湾を越えて海路からもたらされたという説が有力とされる (Bulliet 1975: 44-45)。この家畜がその後どうやってケニアにたどり着いたのかについても、残念ながら有力な考古学的な資料は得られていない⁵⁾。

他方で、前述のアリとエレットは方言間の語彙の比較から、ソマリのうちガレーという集団がケニアを含むアフリカの角南部におけるラクダ利用の普及に寄与したという主張を提示している。ガレーがもともと居住地としていたのは、ルーク付近のジュバ川上流部である。彼らはここでウシを放牧していたが、川の右岸は降雨量が少なく乾燥していることから、長らくこの地域に家畜とともに進出できなかった。しかし、6世紀から8世紀のあいだに彼らはラクダ飼育を開始したと見られており、それによってこの障害を克服することができた。その後、ガレーは次第にジュ

5) 前述のエルボルのサイトではヤギとラクダの歯が発掘されており、考古学者のフィリップソンは6000年から4000年前のものとしている (Phillipson 1984)。この推測が妥当であれば、ラクダがアフリカで独自に家畜化されたことを示す重要な証拠ということになる。ただし、これらの出土物は規模が小さく、発見のあった地層が生物活動によって攪乱されていることから、直接的な年代測定とさらなる発掘によって検証する必要があるという指摘もあり (Marshall 2000: 200-202)、現時点でこの見解は考古学者のあいだでほとんど支持されていない。

バ川を越えてその西側と南側へと移動し、11世紀から15世紀にかけてジュバ川中流部からタナ川下流部までの一帯に広がっていった⁶⁾。彼らは移住先で接触した先住民を追い立て、あるいは同化していった (Ali 1985: 161-174; Ehret 1995: 247-253)。また、彼らはこの時期にラクダの助けを借りながらケニア北東部の乾燥地に進出していった。レンディーレ、ガブラ、サクィエなどのラクダ牧畜民の祖先に当たる集団がガレーと接触したのも、この時期のことだろう。彼らもガレーと同様にラクダ牧畜に生業戦略を転換することによって、ほかの家畜の放牧には適さないケニア北東部の乾燥地を利用可能にするとともに、その過程で現在のようにラクダを中心とした文化と社会構造を発展させていったと考えられる (Heine 1978; Robinson 1985)⁷⁾。

2.2 オロモのヘゲモニー

ラクダの導入によって生業牧畜が浸透したケニア北東部に大転換が訪れたのは、16世紀頃のことである。その引き金となったのが、14世紀から数世紀にわたって断続的に続いたオロモ系の人々の移動である (Oba 2017: 89-110; Turton 1975: 532-535)。オロモの初期の移動は、未婚男性の戦士集団による儀礼的な行動という側面が強かった。そのため、彼らは移動後にエチオピア南東部のホームランドに帰還していた。しかし、オロモは次第に移動先に定着しはじめ、影響圏を拡大して

いった。なかでもとくに規模が大きかったのが、16世紀に移動を開始したオルマとボラナである。彼らは北はジュバ川、西はトゥルカナ湖東岸とケニア山、そして南はサバキ川を大まかな境界線とする範囲で政治的なヘゲモニーを確立し、ガレーに取って代わった。

この広大なテリトリーのなかでオロモの人々がもっとも重視したのが、ジュバ川とタナ川に挟まれた一帯である。彼らはその地をワーマと呼んだ (Oba 2017: 136-138)。この地域は全体的に水場と放牧地に恵まれており、ウシ牧畜をおもな生業とするオロモにとって好都合な環境だった。とくに、アフマドゥの周辺で掘削された数百本もの深井戸や、ラグデラ川の終着点に位置するデシエク・ワーマと呼ばれる巨大な溜池は、彼らに乾期でも利用可能な給水手段を提供していた (Haywood 1913: 463-464; Salkeld 1915: 51-52)。

もっとも、彼らが掌中に収めた地域のすべてがウシの放牧に適していたわけではなかった。とくにツェツェバエの生息する森林地帯は、彼らの進出を妨げる役割を果たした。そのため、オロモの人々はウシ牧畜以外の生業に適した環境に進出すると、多くの場合先住の農耕民、狩猟採集民、都市民を排除する代わりに、彼らと庇護関係をむすんでいた (Stiles 1981; Ylvisaker 1979: 23-28)。被支配民は政治的な独立と安全を保障される代わりに生産物の一部を貢納するなどの義務を

6) 1950年にソマリのウラマーであるシャイフ・アイダルスがアラビア語で著した歴史書には、900年頃にガレーの一部の集団がバラウエの基礎をつくったという伝承が記録されている (Reece 2008: 40-41)。バラウエはソマリア南部のベナディール海岸に位置する港湾都市のひとつで、その後インド洋交易によって栄えた。また、ラム群島を構成するパテ島のシャンガでは、1050年頃には屠殺されたラクダが食されていたと見られる。このことから、すでにこの時期にはラクダを飼育するソマリ祖語系の牧畜民がアフリカの角から南下し、到来していたと推測される (de Vere Allen 1993: 21-35)。彼らがガレーだったのかどうかは不明だが、少なくとも湿度の高いこの地域にそれほど早くからラクダ牧畜が浸透していたとは言えるだろう。

7) 後述するように、政治人類学者のシュレーはガレー、レンディーレ、ガブラ、アジュラン、そしてサクィエの口頭伝承の分析と文化の比較から、16世紀の大移動の過程で枝分かれするまでこれらの集団が言語と暦、ラクダに関する諸規則を共有する単一の集団を構成していったと主張している (Schlee 1989)。本稿もこの議論に立脚しているものの、歴史言語学的な知見を踏まえるならばガレーとその他のレンディーレ祖語系の集団はもともとルーツが異なり、この時期に分化する前に同化したという説明のほうが自然ではないかと考えられる。

負うとともに、オロモの文化的なアイデンティティを受け入れていった。オロモによるこの時期の支配は、「帝国」とも表現される覇権的な政治体制によって特徴づけられる(Oba 2017: 111-134)。たとえば、タナ川流域ではもともと農耕と漁撈を営むバンツー系のポコモと、狩猟採集民のボニが暮らしており、オルマの移住とともにその庇護下に置かれた⁸⁾。オルマは彼らに生産物を納めさせつつ、ウシ牧畜中心の生業形態を維持していたものの、一部の地域では農耕や狩猟、交易活動をおこなうこともあった(Fischer 1877: 351-357; Hobley 1894: 102-107; Werner 1913)。とくにボニの貢納品である象牙はインド洋交易圏の主要な商品として需要が高く、オルマは良好な関係にあった沿岸部のパテ島のアラブ商人と取引することによって多大な利益を手にしてきた(Ensminger 1992: 36-44)。

オロモの移住は、牧畜民の空間であるケニア北東部の乾燥・半乾燥地にも2つの点で決定的な政治的転換をもたらした。第一に、この地域のラクダ牧畜民はオロモの襲撃から逃れるために、ソマリ語でケディ・グール(*kedī guur*)、ガブラ語でガーフ・イリス(*gaaf iris*)と呼ばれる大移動の途についた。彼らが移動の過程で相次いで分化していった結果、現在もケニア北部からエチオピア南部にかけてラクダ牧畜を営んでいるガレー、ガブラ、レンディーレ、アジュラン、そしてサクイエという民族が形成されたと考えられている⁹⁾。第二に、これらのラクダ牧畜民もまたボラナの庇護のネットワークに組み込まれた。ここで重要なのは、ボラナが家畜群の中心としていたウシとラクダでは、放牧に適し

た環境も管理形態も異なっていたという点である。そのため、両者のあいだで生態資源をめぐる競争が起こらず、ラクダ牧畜民はレンディーレを除いてボラナの言語と儀礼実践を取り入れながらも、一定の自律性を確保することができた(Robinson 1985: 247-280; Schlee 1989: 92-144)。

ケニア北東部におけるオロモの支配的地位は数世紀のあいだ維持されたものの、19世紀末までに瓦解していくことになった。政治生態学者のオーバは、その要因を自然災害と戦争の2つに整理している(Oba 2017: 135-215)。前者の点について、まずは感染症の問題を挙げることができる。この時期には人間と動物、あるいはその双方が罹患する感染症がたびたび流行し、オロモの支配の基盤を揺るがしていたのである¹⁰⁾。また、1880年代から各地で頻発した早魃は、事態をさらに悪化させることにつながった。戦争については、マサイ、カンバ、ソマリ、スワヒリなどオロモと隣接する勢力が次第に力を付け、その支配を脅かしていった。なかでもとくに決定的な打撃を与えたのが、この時期に北方からオロモのテリトリーに流入してきたソマリの牧畜民である。次の章では、その歴史的な経過と背景について見ていく。

3 19世紀のソマリの移動

2.2で述べたように、16世紀以降オロモの勢力圏の東限をなしていたのがジュバ川であり、その左岸はソマリによって占められていた。厳密に言うと、ジュバ川が両者を完全に分断していたわけではない(Ylvisaker 1979: 24)。ソマリの一部の集団は右岸に移り住み、

8) ボニはソマリの低カースト集団のひとつで、アウエル、ワータ、サニエとも呼ばれる(Stiles 1981)。言語としてはガレー語に近く、歴史言語学的な研究からはその祖先が2000年から1500年前までにソマリ祖語の話者集団から分化したと推測されている(Ali 1985: 161-174)。

9) ただし、サクイエは1963年のケニア独立直後に始まったソマリの分離独立をめぐる内戦の際にはとんどのラクダを失っており、現在はラクダ牧畜を生業としているわけではない。

10) 1860年代から1890年代にかけて流行した感染症として、具体的にはコレラ、天然痘、トリパノソーマ症、牛疫、牛肺炎が挙げられる(Oba 2017: 165-169)。

オロモのシェーガット (*sheegat*), すなわち被護者になった¹¹⁾。彼らは一定の義務を負う代わりに、オロモのテリトリーで水場と放牧地の利用を認められていたのである。ただし、オロモとソマリのあいだに一定の流動性があったとはいえ、その関係は全体的に前者にとって優位なものであった¹²⁾。しかし、19世紀の前半からソマリはジュバ川の右岸でも徐々に勢力を拡大していき、20世紀の初頭までにオロモに代わってケニア北東部で広域的なヘゲモニーを確立するにいたった(写真4)。

19世紀に始まる大規模な移動は、ソマリ史研究のなかで議論の蓄積が厚いテーマのひとつである。ソマリ史にはおよそ1世紀の研究の蓄積があるが、ソマリの歴史においてこの移動をどのように位置づけるのかについてはこの間に大きく議論が置き換わってきた。その解釈の変遷は研究のアプローチの移り変わりを反映しており、重要である。そこで、次の項では移動の詳細について論じる前に、このテーマがソマリ研究者によってどのように論じられてきたのかをたどる。

3.1 ソマリ史における移動

アフリカのその他の多くの地域と同様に、アフリカの角の国々が宗主国からの独立を達成したのは1960年代のことである。この時期までソマリの歴史を再構築する作業をおもに担っていたのが、ヨーロッパ出身で植民地に赴任した行政官や、社会人類学や東洋学の専門家だった。彼らはソマリの社会と文化に関する初期の学知の形成に貢献したものの、ほとんどの場合、歴史学の専門的な訓練を受けていたわけではなかった。そのため、彼らの歴史叙述はアラビア語文献を含む一次資料や聞き取りによって収集された口述資料の筋書きを基本的にそのまま踏襲する傾向があっ

た (Ali 1985: 2-7; Cassanelli 1982: 28-36)。つまり、ソマリの起源はおよそ10世紀以降にアラビア半島から海を越えてアフリカの角の北東部に渡ってきた、高貴な家柄のイスラムにあるとされていたのである。この説によると、アフリカの角にもともと居住していたのはバンツー系の農耕民とオロモ系の牧畜民であり、ソマリは12世紀頃から放牧地を求めて北から南へと徐々にテリトリーを拡大し、これらの先住民を追い立てながら各地で定着していったという。また、19世紀に始まるソマリの大規模な南下は、およそ8世紀にわたる長期的な移動の最終局面として位置づけられることになった (Lewis 1960)。

このような歴史の解釈は、ソマリの政治構造について論じる際に土台となる概念と理解の枠組みをもたらし、社会人類学の議論の方向性とも結びついている。社会人類学者のルイスによると、ソマリの社会関係を基礎づける原理はトル (*tol*) と呼ばれる父系の出自に求められる。つまり、すべてのソマリは始祖に端を発する総合系譜 (*total genealogy*) を共有し、系譜上のいずれかの先祖に出自をもつ親族集団の一員として行動する。原理的には、始祖から自分の父親まで系譜に連なるすべての先祖が集団を分節する可能性がある。とはいえ、実際には特定の先祖から始まる集団のほうがほかよりも政治的単位として重要となる。このようにソマリの人々の政治的な帰属意識は系譜に基づいた複層的なものだが、ルイスはそれを分節リネージ体系として形式的に説明した (Lewis 1961)。ルイスによると、すべてのソマリはディル、イサク、ハウィエ、ダロード、ディジル、そしてラハンウェインのいずれかに含まれるという。系譜のもっとも上位で人々を分節化するこれら6つの集団を、ルイスはクラン群と呼

11) シェーガットの詳細について、Dalleo (1975: 25-28) を参照。

12) イエズス会の神父ジェロニモ・ロボは、1624年にジュバ川の河口部を訪れている。彼はそこに数千人のオルマが滞在していたこと、そして先住のソマリはその攻撃を受け、奴隷にされていたことを記録している (Turton 1975: 533-534)。

んでいる。また、系譜を通じてそれぞれのクラン群を分節化する親族集団のうち、特定の属性と役割をもつものは上の階層から順にクラン、サブクラン、リネージ、そして血償集団と定義される（表1）。ただし、これらはあくまで分析のための便宜的な概念であり、ソマリ語ではすべて「レール（reer）」と呼ばれる。

ルイスによると、分節リネージ体系としてのソマリの政治構造の特徴がもっとも顕著に現れるのが、ディル、イサク、ハウィエ、そしてダロードである。早くから移住を開始したこれらのクラン群は、アフリカの角のうちラクダ牧畜に適した乾燥度の高い北部をテリトリーとして確保し、現在もこの地域で居住する集団の基礎を築いたとされる。他方で、ディジルとラハンウェインはやや遅れて17世紀頃にアフリカの角北部から移動を開始し、南部のシェベレ川とジュバ川の流域に行き着いた。この地方は比較的雨量が豊富で水場にも恵まれていたことから、彼らは家畜群の中心をラクダからウシに切り替えるとともにソルガム、マメ、トウモロコシなどの天水栽培にも着手し、生業を複合化させていったという。また、南部では系譜的な出自と並んで土地に根ざした帰属概念が重要となってくるが（Helander 2003）、それは移動性の低い定住的な生業形態に転換した結果として説明される。そして、19世紀のソマリの南下とは、一度は北部に定着していたダロードが再び移動しはじめ、ディジルとラハンウェインの抵抗を押しつけて南へと勢力を拡大していくプロセスとして位置づけられるのであ

る（Lewis 1960: 225–227）。

ソマリの政治構造に関する上記の説明は現在でも大枠では共有されているものの、歴史理解についてはいくつかの点で大きく修正されている。第一に、2.1でも述べたように、現在では歴史言語学的な研究の知見を踏まえてソマリのルーツはアフリカの角の北東部ではなくエチオピアの南東部に求められている。したがって、アフリカの角におけるソマリの人口動態は北から南に向かう漸進的な運動というよりは、紀元前一千年紀以降の長期的で複雑なプロセスとして捉え直されている¹³⁾。第二に、これも2.1で述べた通り、ソマリの起源はラクダの導入よりもかなり時代的に先行している。ソマリの祖先に当たる集団はもともとウシ牧畜と農耕の複合的な生業を営んでいたものであり、それは現在のイサクやダロードよりもディジル、ラハンウェインの生業形態に近いものだったと考えられる。ソマリ社会では生業と文化的価値の中心にラクダが置かれているものの、実際にはラクダ牧畜の専門化は紀元一千年紀から進んだに過ぎず、アフリカの角全体で見るとその範囲も限られている（Ali 1985）。

そして最後に、第一の点とも関連するが、イスラームの信仰もあとになって取り入れられたものである。ただし、だからといってイスラームが彼らの社会と文化に表面的な影響しか及ぼさなかったわけではない。アフリカの角にイスラームをもたらしたのは、西インド洋交易の拠点として栄えていた海岸部の都市を訪れたアラブの商人や知識人である。内陸部におけるイスラーム化の過程について

13) この解釈は歴史学者からも支持されている（Hersi 1977; Turton 1975）。ソマリのテリトリー拡大の一方向的、暴力的な側面を過度に強調する従来の学説には、オロモなどの周辺民族を保護するという名目でその移動への介入を正当化するという植民地支配側の政治的な意図も背景にあったことが指摘されている（Cassanelli 1982: 29–30）。植民地社会科学評議会からの研究助成を受けて、英領ソマリランド保護領で下級職の専門家としてフィールドワークをおこなったルイスに対しては、植民地主義と人類学の共犯関係を問う立場から批判が投げかけられている（Kapteijns 2004–2010）。ルイスは植民地の行政機構におけるみずからの知的、政治的な周縁性を自嘲的に振り返りながらこの批判に反論しているが（Lewis 1994: 1–18）、そのこととは別に、ソマリ研究のみならずイギリスの社会人類学に大きな足跡を残した彼の理論がどのような文脈のもとで形成されたのかについては、フィールドノートを含む一次資料に基づいて慎重に検証する必要があるだろう。

は不明な点も多いが、スーフィーの聖者がおもな担い手になったとされる (Cassanelli 1982: 119–146)。彼らは内陸部を転々として各地で予言を与え、神秘的な力を示すことによって人々から崇拜された¹⁴⁾。また、彼らはイスラームの教義だけではなく系譜に関する知識の権威も有していた。そのため、同じ地域内の集団が先祖を共有するように系譜を調整することによって、地域の安寧を促進する役割を果たすこともあった (Reece 2008)。このように、総合系譜には始祖から現在まで続く血縁の関係を記した記録というよりは、無名のスーフィーの聖者たちを「作者」とする歴史的な構築物としての側面がある¹⁵⁾。換言すると、アフリカの角に広く居住する人々が系譜によって束ねられたソマリという単一の民族的なアイデンティティを共有するプロセスは、社会のイスラーム化によって媒介されていたと考えられる (Cassanelli 2009)。

3.2 ジュバ川を渡る

19世紀のジュバ川流域に話を戻すと、この時期にオロモがテリトリーとしていた右岸に大挙して押し寄せてきたのがソマリである。彼らの大半は、エチオピア南東部のオガデン地方から南下してきたダロードのクランに属していた。ダロードのジュバ川右岸への進出は、少なくともその初期には敵対的なものではなかった。右岸では遅くとも19世紀の初頭までにダロードの姿が見られたが、彼らはオロモの庇護を受けながら家畜を放牧していたようである。右岸における両者の平和的な関係はしばらく維持されたものの、ダロードは1830年代からオロモのテリトリーに軍事的な侵略を試みるようになった。当初

右岸に渡った戦士集団はオロモの抵抗に遭って左岸へと押し戻され、ジュバ川を挟んだ膠着状態は数十年のあいだ続くことになる。しかし、やがてダロードのクランがカブララと呼ばれる連合体を組織し、オロモの年齢組制度をベースに成人男性をクラン横断的にまとめ上げたことで、局面が大きく動いた¹⁶⁾。その結果オロモに対して軍事的な優位を得たダロードは、1870年代までにワーマと呼ばれたジュバ川とタナ川に挟まれた一帯でオロモを圧倒し、政治的なヘゲモニーを奪っていった (Oba 2017: 135–161)。

なぜこの時期にダロードはジュバ川の右岸に進出したのだろうか。その点を理解するためには、放牧資源の不足などの生態的背景だけでなく、包括的な地域史を視野に入れる必要がある。第一に、19世紀のアフリカの角南部は東アフリカのその他の地域と同じく経済的な繁栄を享受していた (Menkhaus 1989: 71–127)。モガディシュ、マルカ、バラウエなどのベナディール海岸の都市は、西インド洋を舞台とした国際的な資本主義世界に組み込まれた。これらの都市には欧米から商人が訪れ、乳香や香木などの奢侈品や、象牙、犀角、ダチョウの羽などの狩猟品、あるいは食肉、ギー、皮革といった畜産物を買求めていた。また、シェベレ川下流域の平野部では、この時期に灌漑による換金作物生産が発達した。ここではゴマ、綿花、穀物、染色用の地衣類などがプランテーションで奴隷を労働力として生産され、やはり海外の商人を惹きつけていた (Alpers 2009: 79–97)。さらに、海岸部で発達した交易ネットワークはこれらの商品への需要の高まりに突き動かされて、次第に内陸部も取り込んでいった。

14) スーフィーの聖者たちはその宗教的な力を使って、ローカルな政治の場面でも存在感を示していたとされる。彼らは牧草地や農地をめぐる衝突が起こるとこれを調停し、殺傷事件があれば血償の額を決めるのを補助するなど、政治的な仲裁役を務めていた (Cassanelli 1982)。

15) アフリカの角の南部でフィールドワークをおこなった社会人類学者の研究からも、クラン群やクランから下位の階層の親族集団が派生したのではなく、むしろリネージなど下位の階層集団が核となって上位の集団が形成されていったことが示唆されている (Helander 2003)。

16) NAUK/WO 276/502: 'Customs etc. in Jubaland', author and date unknown.

ベナディールのソマリ商人は象牙などを入手するために小規模なキャラバン隊を組織し、奥地へと派遣した。この時期にルーク、バルデラなどのジュバ川沿いの町はキャラバン交易の拠点となり、賑わいを見せた。そして、このような広域的な経済の構造的転換は地域の人口動態にも影響を与えることになった。ダロードが資源に乏しいオガデン地方を離れて、放牧地だけでなく商業的な機会にも恵まれたジュバ川とシェベレ川の流域へと流入してきたのも、そのためである（Cassanelli 1982: 135-146, 149-161）¹⁷⁾。

第二に、宗教的な文脈もダロードの移動の背景として重要である。19世紀のジュバ川流域では、上述の急速な経済発展への反発からイスラームの改革主義が台頭していたのである（Reece 2008: 49-61）。その中心地となったのが、ジュバ川の中流域に位置するバルデラである。この町では1819年に宗教共同体、すなわちジャマアが樹立され、シャイフの指導の下で支持者が規律的な宗教生活を送っていた。そこでは喫煙、ダンス、過度の性交渉が教義に反すると説かれ、スーフイズムの神秘主義とそれに根ざしたローカルな政治のあり方が糾弾された。また、ゾウは不浄な動物であるという理由から、象牙の交易も禁じられていた。この宗教運動は当初は穏健だったものの、次第に新たな政治・宗教的な秩序を打ち立てるためには軍事的手段の行使もやむを得ないという方向に傾き、1830年代中頃から周辺のソマリに対するジハードが実施されるようになった。ルーク、バイダボ、バラウェなどのソマリの主要な街は次々

と彼らによって制圧され、やがてその矛先はジュバ川右岸のオロモにも向けられた。注目すべきなのは、この運動の指導者がラハンウェインなどアフリカの角南部のクラン群の出身者だったのに対して、その支持者の多くがダロードの牧畜民だったという点である（Cassanelli 1982: 140-141）。宗教的な力がダロードを結合し、移動を促進する役割を果たしたと言えるだろう。

3.3 植民地化とケニアへの移住

この時期にジュバ川の右岸に移動してきたダロードは、おもにヘルティとオガデンの二つのクランである。このうち前者は商業機会を求めてアデン湾沿岸部から海路を經由して到来した人々で、おもにキスマヨ周辺の海岸部の平野を占めていた。サブクランとしてはマジェルティーン、ワルサンゲリ、ドゥルバハンテに分かれる。それに対して、カブララの連合体で中心的な役割を果たし、海岸部を除くジュバ川右岸の後背地で勢力を広げたのがオガデンである。オガデンのサブクランは、本稿で次章から詳細に検討するアウリハンのほかにムハンマド・ズベイル、アブドワク、アブダラー、レール・モハマド、ハバル・スレイマンがある（図3）。牧畜をおもな生業とするオガデンは、オロモと同様にワーマの豊かな生態資源を大いに利用した。彼らはアフマドゥに本拠地を置き、その周辺でオロモから奪った家畜と労働力を使って牧畜と農耕をおこなった¹⁸⁾。

ダロードがジュバ川流域で地歩を固めつつあった頃、外部の勢力もこの地域に触手を

17) この時期の人口変動のもう一つの重要な側面として、奴隷の輸入がある。奴隷とされた人々の民族的な出自は多様であり、インド洋を經由して東アフリカのさまざまな地域から連れてこられた。彼らはおもにシェベレ川下流域のプランテーションで労働者として使役されていたものの、1840年代初頭から20世紀初頭にかけてそこを逃亡し、ジュバ川の下流域でコミュニティを構えた。彼らは周囲のソマリによって完全に同化されることはなく、ゴシャという集合的なアイデンティティを形成した（Menkhaus 1989: 71-179）。

18) ソマリに敗れて捕虜となったオルマは奴隷として売却されるか、ソマリ社会のなかで従属的な地位に置かれた（Ensminger 1992: 44-48）。ソマリの奴隷となったオルマの子孫は、現在はワルデイと呼ばれている。ワルデイのルーツは一樣ではなく、その集合的なアイデンティティは多様な奴隷化の記憶と結びついている（Oba 2017: 193-215）。

伸ばしつつあった。最初に介入してきたのは、ザンジバルのスルターン国である。バルガシュ・ビン・サイードはジュバ川の河口に位置するキスマヨの戦略的な重要性を認め、1870年代に総督を派遣し、石造りの城塞を建設した。次いでキスマヨに目を付けたのがエジプトであり、1875年にイスマーイール・パシャがマッキロップ・パシャ率いる部隊を派遣した。キスマヨは一時的に彼らによって占拠されたものの、その支配は短命に終わり、再びザンジバルのスルターンの掌中に収められた (Turton 1970b)。さらに、1880年代に入るとこの競争は「アフリカ分割」の流れのなかに飲み込まれた。列強間で利害調整がおこなわれ、その結果、アフリカの角南部のうちジュバ川より西側と東側はイギリスとイタリアの勢力圏に含まれることが国際的に承認された¹⁹⁾。

アフリカの角におけるザンジバルの関与が海岸部に限られており、キスマヨを含む港湾都市における関税徴収で満足していたのに対して、イギリスとイタリアは内陸部との交易活動に可能性を見出していた。ただし、両者が統治を委託した勅許会社もまたあくまで経済的な利益の追求を目的としており、沿岸部から遠く離れた内陸部まで行政のネットワークを張り巡らせる余力は持たなかった。そこで、勅許会社は内陸部に職員を派遣して有力な集団にアプローチしたものの、アフリカの

他地域と同様にその内部にまで介入することはなく、保護協定を結び、権力者を首長に任命するのみであった²⁰⁾。イギリスの東アフリカ会社にとって、それはジュバ川右岸に根を下ろしつつあったオガデンと友好的な関係を築くことを意味していた。

イギリスの存在は、オガデンの社会にただちに大転換をもたらしたわけではなかった。1894年に東アフリカ会社が財政的に破綻すると、その権利はイギリス政府に引き継がれた。ジュバ川右岸の広大なテリトリーは、東アフリカ保護領 (1895年7月設立) が最初に設置した州のひとつであるジュバランドに組み込まれ、州行政を管轄する副弁務官をはじめとする行政官が派遣された²¹⁾。とはいえ、最初期に副弁務官を務めたロバート・サルケルドが「首長に報酬を支払い、部族間の問題については介入を最小限に抑えること」(Cashmore 1965: 173) と強調したように、経過観察 (observation) と呼ばれた非介入主義的な方針は東アフリカ会社時代から変わらなかった²²⁾。それでも、イギリスとの接触はオガデンにとって2つの政治的な帰結をもたらした。第一に、それはオガデンのさらなる移動を促した。依然としてイギリスの影響圏はキスマヨ周辺の海岸部にとどまっていたものの、彼らは次第に支配の範囲を広げつつあり、オガデンが本拠地としていたアフマドゥも自立的な地位を失った。また、オガデ

19) イギリスの東アフリカ会社がザンジバルのスルターンからベナディールの港湾都市の租借権を獲得したのは、1889年9月のことである。このうち、モガディシュやバラウエなどジュバ川の東側に位置する都市をめぐる権利はただちにイタリアに移譲された。この決定の背景には、アフリカの角の海岸部に領土的野心を抱いていたイタリアと協力関係を築くことによってアフリカの植民地獲得競争でフランスに対抗できるという、イギリス政府の計算が働いていた (Hess 1966: 13-38)。

20) イタリア側では当初、この活動はヴィンセンツォ・フィロナルディ率いるフィロナルディ会社に任されていた (Cassanelli 1982: 201-202)。

21) 東アフリカ保護領が当初設置した州はセイディ、ウカンバ、タナリバー、そしてジュバランドの4つである。1902年にはナイバシャ、ケニア、キスムが追加された (Cashmore 1965: 17)。なお、東アフリカ保護領の法的な地位は1920年に植民地となり、それにともない名称も「ケニア植民地」に変更された。

22) そのため、ジュバランドではほかの州とは異なり当初は下位の行政区画が置かれていなかった。ジュバランド州がキスマヨ県、ゴシャ県、アフマドゥ県、セレンリ県の4つの県に分割されたのは、1914年のことである。

ンが政府に反抗的な行動をとると懲罰隊が派遣され、多数の家畜が没収された²³⁾。オガデンのサブクランはこの事態に対して組織的な抵抗運動を展開するのではなく、生業牧畜の移動性を発揮して政府の手の届かない奥地に移住した。

第二に、政府がオガデンの首長を任用したことで、結果的に彼らの移動に分散性がもたらされた。3.1でも述べたように、ソマリは階層的な政治制度を持たない無頭的な社会であり、日常的な社会生活における重要な問題は成人男性が参加するシール (*shir*) という会議によって決定される²⁴⁾。一方で、ソマリでは植民地化以前からそれぞれのクランやサブクランはスルターン (*sultaan*)²⁵⁾ と呼ばれる指導者によって率いられてきた (写真5)。ルイスが「クランの民族的、道徳的な結束の象徴であり、焦点でもある」(Lewis 1961: 205) と表現したように、スルターンはみずからの集団を対外的に代表する存在に過ぎず、一般的な首長制社会のように政治権力が偏在することはほとんどない。多くの場合、スルターンの地位は世襲ではなくシールでの話し合いを経て選出される。スルターンの権威はその人物自身に内在するというよりは、クランの成員による正当化に依拠していたのである²⁶⁾。しかし、植民地化という事態によってスルターンの権威の基盤は一変した。ジュバ川の流域に限らず、ソマリの居住地に進出したヨーロッパの国々は資源の乏しい内陸部で一から行政機構を構築する関心もリソースも持ち合わせていなかった。そのため、各地

でソマリの社会の内部に直接介入する代わりに、スルターンをはじめとする有力者を任命し、法と秩序の担い手とする間接統治的な方針が採用された。それはスルターンの権威がクランの成員のみならず外部の勢力によっても正当化されることを意味しており、スルターンのなかにはこの機にみずからに権力を集中させ、クランの求心力を高める者も現れた (Höhne 2007: 157–161)²⁷⁾。他方で、それは同時にクランのまとまりが瓦解する方向にもつながった。間接統治と伝統的権威のあいだに同様の両義的な関係があったことは、アフリカの各地で指摘されてきた (Spear 2003: 8–13)。オガデンのケースでも典型的に見られたこの政治的特徴は、彼らの移動の過程を検討するうえでも重要な点である。

イギリスの進出時にオガデンのスルターンの地位にあったのが、ムルガン・ユスフである。彼の出身のサブクランはムハンマド・ズベイルで、おもにアフマドゥを拠点としていた。オガデンとの協定締結を求めている東アフリカ会社が交渉相手としたのがこの人物であり、当局は彼をオガデン全体の首長として正式に認め、給料を支払うだけでなく、様々な便宜を図った。逆に、ムルガン・ユスフにとって政府とのあいだに構築されたチャンネルは好都合なリソースであり、それを通じて金銭的なリターンを手にするとともに、イギリスとオガデンのあいだの仲介者として存在感を強めた。しかし、彼が後ろ盾としていたムハンマド・ズベイルはサブクランとしてはもっとも規模が大きく、カブララというサブ

23) もっとも有名な事例が、1900年11月にサルケルドの前任の副弁務官であるアーサー・ジェンナーが殺害された事件への対応として、同年12月に展開された作戦である (BL/IOR/L/MIL 17/17/7: 'Operations in Jubaland 1900–1901' by A. W. Money, date unknown)。

24) BOD. MSS. Afr. s. 2341: Papers of Harold Kittermaster, date unknown.

25) 地域によってはガラード (*garaad*)、ウガース (*ugaas*)、ボコル (*boqor*) という呼称が使われる (Lewis 1961: 203–204)。

26) もっとも、植民地化以前にすべてのスルターンがこのように制限された地位に置かれていたわけではない。特定のカリスマ的なスルターンやその出身クランに政治・経済的な権力が集中した結果、国家的な政治体が形成されることもあった。具体的には、マジェルティーン、アダル、アジュラン、そしてグレディのスルターン国が挙げられる (Cassanelli 1982: 84–118; Lewis 1961: 208–209)。

27) 同様の政治的再編はソマリ以外の牧畜民でも見られた (Asad 1970)。



写真5 ソマリのスルターン (2列目左から4人目)

出典：BA/2005/078/1/142



写真6 ロリアン湿地

出典：Dracopoli 1914

クランを横断する紐帯も依然として残っていたとはいえ、オガデンのすべてのサブクランが彼の権威に服従し、一枚岩にまとまったわけではなかった。とくにキスマヨとアフマドゥから離れた場所を拠点としていたサブクランは、イギリスとスルターンの意向に従うどころか両者が関係を強化するにつれて家畜とともに移住し、物理的に距離をとる姿勢を見せた。1896年5月にムルガン・ユスフが亡くなり、その息子のアフメド・ムルガンが若くしてスルターンの地位に就くと、その傾向に拍車がかかった (Turton 1970a: 118-267)。

以上のようにイギリスとの接触を契機として、オガデンは1890年代から1900年代にかけてジュバ川の流域を離れて現在のケニア北東部に拡散した (図4)。このときの移動の経路は、家畜群の構成によって大きく分かれていた。まず、ムハンマド・ズベイルとアウリハンというラクダ牧畜をおもな生業とするサブクランはワジアに向かった。ワジアは降雨が少なく、極度に乾燥した厳しい環境である。その周囲には100キロメートルに渡ってほとんど水場が存在しないが、ワジアのみは例外であり、石造りの井戸が多数築かれていた (Aylmer 1911: 293-294)。19世紀末の時点でこれらの井戸群はボラナ、アジュラン、ガブラ、サクイエによって共同で利用されていたものの、20世紀の初頭にダワ川を越えて南下してきたハウィエ・クラン群のデゴディアによって、その地位は脅かされていた。デゴディアの数年後にはムハンマド・ズベイルとアウリハンが相次いで東からワジアに到来し、井戸群をめぐる競争は激しさを増した (Turton 1970: 491-498)。

それに対して、ウシ牧畜民のサブクランが目指したのはタナ川である。タナ川流域で数

世紀のあいだ政治経済的な優位を確保していたオルマは、南方から侵攻してきたカンバとマサイによって19世紀中頃までに弱体化していた。この事態に追い打ちをかけたのが、1860年代にジュバ川を渡ってこの地にやってきたカブララの戦士集団であり、オルマの人々はその脅威から逃れるために海岸部の都市やタナ川の右岸に移っていった (Fischer 1877: 347-348)。その後、彼らはアフマドゥ周辺の放牧地に引き返しており、タナ川は奴隷と家畜、そして象牙を入手するための遠征先のひとつとなっていた。しかし、19世紀の終わりが近づくと、アブドワクとアブダラーの2つのサブクランはオガデンのスルターンとキスマヨのイギリス政府への反発からタナ川の左岸に本格的に拠点を移していった。1905年には、中流部に位置するブラの周辺でおよそ15,000人のソマリと、50,000頭の家畜が集まっていたことが報告されている²⁸⁾。

地理的に見てワジアとタナ川のちょうど中間に位置しているのが、エワソ・ニロ川水系を構成するロリアン湿地である (写真6)。同時期にソマリの移住先のひとつになったこのエリアには、北からムハンマド・ズベイルとアウリハンが、そして南からアブドワクが流入した。このうち最終的にロリアンをテリトリーとしたのがアウリハンだが、その経過について次の第4章で詳述する前に、彼らの到来以前にこの地域がどのような状況に置かれていたのかを確認しておこう。

19世紀末までのロリアン湿地の歴史には不明な点が多いが、ヨーロッパ人の探検家の記録をもとに概況をうかがい知ることができる (Dracopoli 1914; Haywood 1913; Salkeld 1915)²⁹⁾。ロリアンについて最初に現地情報を得たのは、1887年から翌年までヨーロッ

28) Thomas 1917: 47; KNA/PC/NFD 4/6/1: 'The Administration of Jubaland', author and date unknown.

29) 19世紀末から20世紀初頭にかけて地理学的な調査が実施されるまで、ヨーロッパの地理学コミュニティではロリアンが湖沼なのか湿地なのか確認されておらず、またどの水系を構成するのか ↗



図4 ジュバランドにおけるソマリのおもな集団の分布 (20世紀初頭)
出典: El-Safi (1972) をもとに, ささやめぐみ氏作成

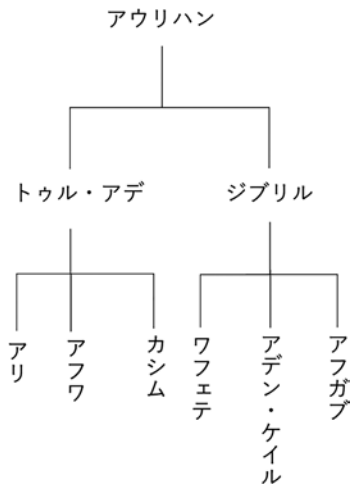


図5 アウリハンのセクション
出典: 聞き取りにより筆者作成



図6 アウリハンのテリトリー
出典: 以下をもとに, ささやめぐみ氏作成。KNA/PC/NFD 4/2/2: Acting District Commissioner, Wajir to Senior Commissioner, NFP, 26 May 1927.)

表1 ソマリの各分節単位の特徴

名称	特徴
クラン群 (clan family)	始祖まで 30 世代以上さかのぼる。社会関係を強く規定するものの、政治的単位として機能することはない。
クラン (clan)	始祖まで 20 世代以上さかのぼる。政治単位として機能する。
サブクラン (sub-clan)	クランを構成する。
リネージ (primary lineage)	始祖まで 6 から 10 世代さかのぼる。外婚制の単位。
血償集団 (dia-paying group)	始祖まで 4 から 8 世代さかのぼる。ソマリの人々はこの単位の集団の成員としてもっとも頻繁に行動する。

出典: Lewis (1961) をもとに筆者作成

パ人として初めてケニア北部を探検し、トゥルカナ湖を「発見」したことで知られるサミュエル・テレッキである。テレッキ自身はそこに足を踏み入れることはなかったものの、探検中に雇用したマサイの道案内人から聞いた話としてロリアンではるか昔にマサイとクワヴィが共住していたこと、彼らはすでにそこを離れており現在は誰も住んでいないことを日誌に記している (Kotrba 2008: 153)。その数年後に探検家たちがロリアンとその水源であるエワソ・ニロ川の下流域を踏査した際には確かにマサイの姿はなく、代わりに目にしたのは牧畜民のサンプルとレンディーレだった (Arkell-Hardwick 1903; Broun 1906)。サンプルはマサイに近いナイロート系のウシ牧畜民で、もとはリフトバレーのバリンゴ湖畔に居住していた。近隣のマサイ系の集団に追われて移住を開始した彼らは、やがてトゥルカナ湖の南岸でレンディーレと接触し、同盟を結んだ。両者はその後、ボラナ、ガブラ、マサイなどを圧倒しながら北と東に向けて拡大し、1870年代までに北はトゥルカナ湖、南はエワソ・ニロ川、東はワジアまで到達している。ロリアンに彼らが現れたのも、この頃のことだろう (Turton 1970a: 96–101)。

ただし、サンプルとレンディーレはこの湿地帯に定着したわけではなさそうである。その大きな要因は、ロリアンの生態資源としての特性にあったと考えられる。ロリアン湿地はエワソ・ニロ川からの氾濫水を水源としており、そこに形成される溜池や草地は乾季の貴重な放牧地となる。また、牧畜民だけでなくゾウやサイなどの野生動物もその水資源に

引き付けられていたことから、乾季のロリアンは一時的に交易拠点となり、狩猟品や家畜を求めてケニア中央部やベナディール海岸から商人やハンターも訪れていた (Dracopoli 1914: 214–216; Robinson 1985: 298–320)³⁰⁾。とはいえ、ロリアンの規模は年によって大きく変動する傾向があり、旱魃時には数年にわたって溜池も湿地も干上がることがあった (Kotrba 2008: 159)。つまり、ロリアン湿地は数少ない乾季でも利用可能な水場のひとつではあったものの、家畜の飲用に必要な多量の水をつねに確保できるタナ川やワジアの井戸群と比べると安定性の点で劣っていたのである。それは、ロリアンからサンプルとレンディーレが弱体化したのちにボラナ、マサイが相次いで勢力を伸ばしながらも定着することなく、「権力の空白状態」(Turton 1970a: 103)が続いたこと、そしてソマリのこの地域への流入が比較的遅かったこととも無関係ではないだろう。

4 アウリハンの移動と領域化

前章で概観したように、ソマリの人々は19世紀の地域的な移動の末にケニアの北東部へと到達した。この移動はオガデンのサブクランを中心としたもので、スケールが大きく、時期的にも集中していた。もっとも、それは統一的な運動ではなく、放牧資源の分布、家畜群の構成、隣接する集団間の関係、あるいは植民地権力との距離感によって、サブクランごとにその経路と経過は大きく異なっていた。その後、ほとんど同じ時期にケニア北東部で行政に着手した植民地政府は彼らに集

↗ も分かっていなかった。ロリアンがジュバ川の支流のひとつの水源地とする説も有力とされており、仮にこの説が証明されればベナディール海岸とケニアの中央部をむすぶ安定的な水上交易のルートを開拓できる可能性があった。つまり、ロリアン湿地をはじめとするエワソ・ニロ川水系の水文学的調査は学問的な関心や帝国的な利害と絡み合っており、探検という事業はそれらによって制度的、経済的に支えられていたことになる (Kotrba 2008: 153–163)。

30) 1903年に『北ケニアの象牙商人』という探検記を上梓したアルフレッド・アーケル＝ハードウィックは、そのうちの一人である。彼はイギリス出身のハンターで、二人の仲間とともにロリアンに遠征した目的は地理学的な発見ではなく象牙の買い付けであった (Arkell-Hardwick 1903)。

団ごとに異なるテリトリーを割り振り、集団どうしを境界線によって物理的に区分しようとした。しかし、少なくとも植民地後期にいたるまで境界線の管理は実体をともなっておらず、人間も家畜などのモノも多孔的な線を易々とすり抜け、交通していた。なぜこのような事態が維持されたのだろうか。それは植民地支配の実行力の限界とは異なる図式で説明可能なのだろうか。以下、この章と次章ではアウリハンのサブクランを事例にこれらの点について検討する。

4.1 移動

オガデンのサブクランが西方への拡散を開始した19世紀の終わり頃、アウリハンの人々はジュバ川の兩岸をテリトリーとしていた³¹⁾。この時点では右岸に定着していたアウリハンは少数派で、主力は依然として対岸に留まっていたと考えられる。当時の左岸の様子については、ヨーロッパ人探検家の記録を参照することができる(Cavendish 1898; Donaldson-Smith 1897; James 1888; Swayne 1895)³²⁾。それによると、彼らが住んでいたのはジュバ川とシェベレ川のそれぞれの上流部に挟まれた一帯で、現在のエチオピアのソマリ州アフデール県の南縁部に当たる。この地域の気候は非常に乾燥しており、FAO (2017)によるとアフデール県の年間降雨量は300ミリメートル以下で、エチオピアのなかでも旱魃のリスクが高いエリアのひとつとして位置づけられている。アウリハ

ンの人々は、雨季のあいだはこの地域を通る間欠河川に掘られた井戸を水場とし、乾季になるとジュバ川とシェベレ川の流域に移動しながら牧畜を営んでいたようである。また、彼らは近隣の集団や商人をしばしば襲撃することから、危険な存在と見なされていた。

アウリハンはアリ、アフワ、カシム、ワフェテ、アデン・ケイル、アフガブという6つのセクションによって構成される(図5)。それぞれのセクションは、この地域で緩やかに水場と放牧地を棲み分けて暮らしていた。セクションのあいだに階層性はなく、基本的には平等な関係にある。ただし、6つのセクションのうち前三者と後三者はそれぞれ系譜上の父であるトゥル・アデとジブリルという上位の単位でまとまり、両者は対立することがある。さらに、ソマリの社会では一般的に特定の集団の政治力はその規模に比例する傾向があり、クランやサブクランを代表するスルターンももっとも人数の多いセクションの有力者から選出するのが通例となっている。アウリハンの場合それに当たるのがアリのセクションで、現在に至るまで歴代のスルターンのほとんどはアリの出身者によって占められてきた。

ただし、3.1で述べたようにソマリは分節リネージ体系によって特徴づけられる社会であり、アウリハンも強く中央集権的に組織化されていなかった。この点で特筆に値するのが、アフガブである。アウリハンのなかでもジュバ川寄りのテリトリーを占めていた彼ら

31) KNA/PC/NFD 4/6/1: 'History of the Administration of Jubaland', author and date unknown.

32) アウリハンに言及した最初のヨーロッパ人は、イギリスからやって来たフランク・ジェームズである。彼はアデンで物資を調達したあと、1884年12月にアデン湾沿岸のベルベラを出発し、現在のソマリ州を縦断してシェベレ川に到達した。彼が滞在したバリ(現在のアバーレイ)という街は、当時シェベレ川左岸を占めていたハウィエ系のクランのスルターンが本拠地としており、約1,500人の人口を抱えていた。ジェームズはこのスルターンからアウリハンについて情報を得ているが、川を越えて旅を続けることなく帰途についたため、彼らと直接接触する機会を持たなかった(James 1888: 168-189, 327-335)。実際にアウリハンのテリトリーに足を踏み入れ、貴重な見聞の記録を残しているのがアメリカ人の探検家アーサー・ドナルドソン＝スミスである。1894年7月にベルベラを出発した彼の一行は、ほとんど同じルートを通して翌年1月にバリにたどり着いた。ドナルドソン＝スミスはトゥルカナ湖を最終的な目的地とする地理学的な調査の途上であったことから、バリから進路を西にとってアウリハンのテリトリーを通過している。

は、ほかのセクションから離れて自律的に行動する傾向があった（Donaldson-Smith 1897: 135-143）。それを可能にしたのが強大な軍事力であり、とくに銃とウマによって下支えされていた。前者の大半は、フランスのサン＝エティエンヌ造兵廠で製造されたグラス銃である。19世紀末のアフリカの角では、フランスが拠点を置いていたジブチを経由地としてこの銃が多数流入し、広く出回っていた（Chew 2012: 113-115）。アフガブの人々はテリトリーを接するボラナと取引することで、銃と弾薬を手に入れていたという³³⁾。また、彼らがウマを飼育していたことはヨーロッパ人探検家の記録から確認できる（Swayne 1895: 250）。ソマリが暮らす乾燥地の環境は全般的にウマの繁殖に適しているとは言えないが、一部の集団は効率的に家畜略奪（レイディング）をおこなうために所持していた（Samatar 1982: 21-23）。アフガブが具体的にどのような経路でウマを入手したのかは不明だが、ソマリのほかのクランか、より乗馬文化に親しんでいたボラナから入手したと見られる。彼らはこれらのテクノロジーを活用することでほかのセクションを圧倒したようであり、1907年頃に作成されたある行政資料はアフガブを除くアウリハンの戦士の推定人数を1,500人とする一方で、アフガブは4,000人を擁すると記している³⁴⁾。

アウリハンの人々が、3.3で説明した要因に加えてダルヴィーシュの襲撃から逃れるためにジュバ川の右岸への移動を加速させたのは、20世紀初頭のことである³⁵⁾。このとき

すでに、ジュバランドの北部はマレハンというクランによって押さえられていた。マレハンのなかにはオガデン地方でダルヴィーシュ運動に参戦したのちに、多量の銃と弾薬を携えてこの地に逃れてきた集団が含まれており、20世紀初頭からルークを中心に急速に勢力を伸ばしていたのである（Turton 1969: 649-651）。そのため、アウリハンはジュバランドの中部で、具体的にはセレンリとムフトゥをそれぞれおおよそその北限と南限としながら右岸に進出していった³⁶⁾。左岸のテリトリーと同様に、この地域も大半は起伏に乏しい乾燥地からなっている（French 1913: 430-432）。マレハンと境を接するディルハラというエリアはなだらかな丘陵地になっており、雨季の放牧地として利用されていたが、それを除くとジュバ川の右岸もまた全体として水場に恵まれているとは言い難かった。アフマドゥの井戸群とデシク・ワーマを含むラグデラ川流域の水資源は、ムハンマド・ズベイルによって専有されていた。そのため、アウリハンの人々はジュバ川のほかには間欠河川で掘削された井戸や、降雨後に一時的に形成される溜池を頼るほかなかった。

アウリハンはオガデンのほかのサブクランと比べると豊富な戦力を備えていたわけではなく、当初は銃で武装しておらず槍のみで戦っていた。しかし、彼らはもともと戦士としての評価は高く、徐々に銃を取り入れて軍事的に強化することで着実に西方に広がっていった³⁷⁾。1906年には、少数のアウリハンがすでに緊張が高まっていたワジアの井戸群

33) 20世紀初頭の時点で価格の相場は1丁当たり4から7頭のウシか、7頭のラクダだったという（KNA/PC/NFD 4/6/1: 'Notes on the Aulihan and the Attached Tribes', author and date unknown）。

34) KNA/PC/NFD 4/6/1: 'History of the Administration of Jubaland', author and date unknown.

35) ダルヴィーシュとは、広義にはスーフィー教団のメンバーを意味する。この文脈では、イギリス人から「狂信者ムラー」と呼ばれたサイイド・マハメド・アブドゥッレ・ハサンとその支持者によって展開された、植民地支配に対する大規模な抵抗運動を指す。アフリカにおける反植民地主義的な初期抵抗のほとんども大規模かつ長期化した事例のひとつに数えられるこの運動は、19世紀末に始まって1920年にハサンが死去するまで続いた。

36) KNA/PC/NFD 4/6/1: 'Notes on the Aulihan and the Attached Tribes', author and date unknown.

37) アウリハンは1912年頃には250から300丁ほどの小銃を有していたという。これに合わせて、戦士の推定人数もおおよそ2,000人まで増加した（*ibid.*）。

に到達したことが、行政官によって報告されている。彼らは移住の過程で、近隣の諸集団と放牧資源をめぐる衝突を繰り返した。とくに、アウリハンのテリトリーの北側と南側をそれぞれ占めていたマレハンとムハンマド・ズベイルとの対立は全体的に根深いものだった。ただし、両者との関係は決して一面的だったわけではなく、共通の敵を目前にして一時的に連携することもあった (Turton 1970a: 440-441)。

また、アウリハンはこの地域で勢力を確立するなかで、ソマリの他集団を被護者 (シェーガット) として迎え入れた。シェーガットになった集団は家畜をほとんど所持しておらず、農耕をおもな生業としていた。多くの場合、それらの集団はアウリハンと同じくカブララに属していた。このことは、サブクランの垣根を越えた紐帯が依然として機能していたことを物語っている³⁸⁾。アウリハンには彼らに安全を保障する代わりに、テリトリーの拡大にもなって必要となった軍事力と労働力を補完していたのである。

4.2 植民地支配の拡張と南北アウリハンの分裂

3.3でも触れたように、初期の植民地当局はソマリに対して経過観察と呼ばれる方針をとっていた。彼らの移動や対立への政府の直接的な介入は、最小限に留まっていた。しかし、20世紀初頭から内陸部でアウリハンを含むソマリの移動が加速し、放牧資源をめぐる集団間の衝突が激しさを増すにつれて、この方針の限界が露呈していった。さらに、1889年に皇帝に即位したメネリク二世のもとでエチオピア帝国が南方への積極的な進出を続けていたこともあり、イギリスとしては領域的な正当性を確保するために支配を実効

化する必要に迫られた。そのため、経過観察は完全に放棄されたわけではないものの調整を余儀なくされ、イギリスは重い腰を上げてジュバランドで行政の確立に着手することになった。その手始めとして、当局は1910年にオガデンとアウリハンがそれぞれ本拠地としていたアフマドゥとセレンリを占拠し、行政官と部隊を派遣した。また、1914年にはジュバランド北部で軍事衝突を繰り返す、ダルヴィーシュとの連携が指摘されていたマレハンから銃を没収するために、懲罰隊を派遣した (Turton 1970a: 461-487)。ジュバランドの西側に広がるケニア北東部でも、同じ時期に変化が訪れた。この地域でもやはり行政の開始が遅れていたが、1909年には最初の行政府がモヤレとマルサビットに置かれ、翌年には州に相当する行政区画として北部辺境県が制定されたのだ。

イギリス政府にとって、イタリア領であるジュバ川左岸から移入しつづけるアウリハンは悩みの種だった。アウリハンはムルガン・ユスフがオガデンのスルターンだった時代から彼らに対して反抗的な態度をとっていた。政府側としても、アウリハンの主要なテリトリーが海岸部から遠く離れていたことから、その手綱を握るのは難しかった。そこで、政府はアウリハンのスルターンを友好的な人物に置き換えることで、ジュバランドの後背地で「安上がりなヘゲモニー」(Berry 1992)を実現しようと試みた。当時のスルターンは、アリ・セクション出身のハッサン・ワルファである。彼は1900年のジェンナー殺害事件の首謀者の一人とされており、現在もアウリハン内では植民地支配に対する抵抗を体现する存在として語り継がれている³⁹⁾。それに対して、政府が新たなスルターンとして目を付

38) 当時のアウリハンにはマカブル、バルティリ、バラード、シェイカール、ドーンデーダと庇護関係を結んでいた。このうち前四者はオガデンで、カブララに属していた。ヘルティ・クランのマジェルティーンのセクションのひとつであるドーンデーダのみ、カブララと関わりがなかった (*ibid*)。

39) インタビュー (フセイン・ゴール、モドガシ、2010年10月23日)。筆者の聞き取り調査では、ジェンナーはロリアン湿地の東に位置するリボイの付近で殺害されたと言われていた。そのため、彼は「リボイ将軍」という通称で語られていた。この事件については、注23も参照。なお、行政文

けたのがアブディラフマン・ムルサルだった（写真7）。イタリア領のアウリハンの有力者を父に持つこの人物は、一時期イタリアの企業で働いたあと、19世紀末頃にイギリス側に渡ってきたとされる。ヨーロッパ人のもとでの勤務経験を買われたためか、彼はイギリス側でも政府に雇われて関税徴収の補助や情報収集などの仕事をしていた（Simpson 1994: 13-14）。ジュバランドに限らず植民地期のアフリカでは、彼のような現地人が通訳、書記、事務員などの多様な職を担っていた。彼らは単に帝国の円滑な運営を支えただけでなく、植民地支配という新たな事態において支配者と被支配者の関係を再構成する媒介者（intermediaries）の役割も果たしていた（Lawrance, Osborn, and Roberts 2006）。それらの現地人からは行政機構の階梯を進み、首長にまで登りつめる人材も現れたが（Fallers 1969: 74-84）、アブディラフマン・ムルサルもそのうちの一人であった。一時は反旗を翻した過去を持つことからジュバランド当局内で彼の人物評価は分かれていたが、副弁務官を務めたジェンナーとサルケルドをはじめとして一部の上級行政官は彼の政治的手腕を重視していたようである。政府としては彼の権威に依拠しながら間接統治を遂行するのが理想的な筋書きであり、その点では彼にメッカ巡礼の経験があり、ムスリムとして崇敬を集めていたことも好都合だった。

アブディラフマン・ムルサルを媒介者としてアウリハンの協力を獲得し、それを足掛かりとして内陸部に統治を浸透させるという政府の目論見は、ある程度功を奏したと言えるだろう。とくに、1914年にマレハンに派遣された部隊は規模も装備も十分ではなかった

ため、アウリハンからの助力が任務の遂行の鍵となった（Oba 2017: 236-237）。しかし、全体として見ると政府の目論見は大きく外れる結果となった。というのも、アブディラフマン・ムルサルは表面的には政府と友好的な関係を維持しながらも、度々その意に沿わない行動をとったからである。政府は集団間の紛争の激化を未然に防ぐために銃の流通に目を光らせていたが、アブディラフマン・ムルサルはマレハンやムハンマド・ズベイルに対抗するために密輸入を続けていた。彼が政府のマレハン派兵に協力したのも、最大のライバルの力を削ぐという意図が背後にあった。また、アブディラフマン・ムルサルはムハンマド・ズベイルを挟み撃ちにするために、ほかのセクションが移住したあともジュバ川の左岸に留まっていたアフガブに度々使者を送り、協力を求めている（Thomas 1917: 44）。彼は決して、政府の従順な協力者などではなかった。

それだけでなく、アブディラフマン・ムルサルは政府との関係を利用することすらあった。1915年に総督のヘンリー・ベルフィールドと面会する機会を与えられた彼は、面会先のナイロビから戻ってくると中央政府との密接なつながりを殊更に強調した。さらに、彼は総督がワジアからセレンリまでの土地をアウリハンのテリトリーとして認めたとも宣言した。この発言は、とくに井戸群をめぐる緊張状態が高まりつつあったワジアにおいて重要な政治的意味を持った。なぜなら、ワジアで初めて姿が確認された1906年には少数に過ぎなかったアウリハンは、1913年から急激に増加しており、現場の行政官は混乱を避けるために彼らを排除していたからである⁴⁰。

↗ 書ではハッサン・ワルファはアウリハンの複数の首長のうちの一人という位置づけである。しかし、著者がおこなった聞き取り調査では、この人物は当時のアウリハンのスルターンとして言及されていた。政府がどこまでアウリハン内の政治的動態に精通していたのかは疑問が残るところであり、本稿では後者の解釈に従っている。

40) 1914年にワジア県長官ロバート・デックが報告したところによると、この時点でワジア周辺にはおよそ1,200人のアウリハンが滞在していたという。家畜の推定頭数は2,000頭であり、その大半はラクダだった。その前年の11月に北部辺境県長官のジョン・ホープが作成した、ワジア周



写真7 アブディラフマン・ムルサル（右から4人目）と警護兵
出典：BA/2005/078/1/155



写真8 所有を表すラクダの焼印
出典：筆者撮影

総督の発言の真偽や意図はともかく、アウリハンの西進に正当性を与えると解釈されたのは確かだろう。

もっとも、アブディラフマン・ムルサルの登用がアウリハン全体の集合的な利益に直結したわけではない。実際のところ、ムルガン・ユスフの場合と同様に、植民地当局の後押しによるスルターンの権威の強化はアウリハンのセクション間の分節化を促進したのだ。この問題は、アブディラフマン・ムルサルの出身セクションの系譜上の位置とかかわっている。4.1でも確認したように、アウリハンはアリ、アフワ、カシム、ワフェテ、アデン・ケイル、アフガブによって構成される。このうち、もっとも有力なアリからスルターンを選出するのが一般的だが、アブディラフマン・ムルサルはワフェテというジブシル系の少数派のセクションの出身だった。彼は強大なセクションの後ろ盾を持たなかったため、その力を政府からの信頼に大きく依存していた。そしてそのことは、彼がスルターンとしてアウリハンの結束の象徴の役割を果たすのを困難にした。

上述のように、アブディラフマン・ムルサルはイタリア領のアフガブに何度もジュバ川を渡って合流するよう打診したものの、失敗に終わった。移住前から強力な軍事力を背景に自立的な存在となっていたアフガブは、ワフェテと同じジブシル系に属するとはいえ、スルターンの権威に容易に従わなかったのである。最終的にアフガブがイギリス領にやってきたのは1908年頃のことで、それもアブディラフマン・ムルサルの説得に応じたというよりイギリス領でダルヴィーシュとエチオピア帝国の侵攻が次第に激しさを増したためだった (Turton 1969: 649–650)。また、アブディラフマン・ムルサルとトゥル・アデ系

のセクションのあいだにも溝があり、それは1911年を境にさらに深まった。この年の3月頃、トゥル・アデに属するアフワの若者がイタリア領に渡ってラハンウェインを襲撃し、5人を殺害して多数のラクダとウシを奪うという事件が起こった。政府はただちに部隊を派遣するとともにアウリハン、ラハンウェイン間で協議の場を持ち、アブディラフマン・ムルサルに略奪した家畜の返還と殺害に対する血償の支払いを命じている。アリとアフワのセクションは、アブディラフマン・ムルサルがこの命令に易々と従ったことに不満を抱いたと見られる。そのため、同年6月に行政府が新設されたばかりのセレンリに輸送用のラクダ200頭の提供を求められると、彼らは要求を拒否し、ほかのセクションに対して団結して政府に攻撃を仕掛けるよう訴えかけた。しかし、この提案は賛同を得られなかったため、両者のセクションはセレンリの本拠地を離れて西のエルワク方面に移住していった⁴¹⁾。この事件をひとつの契機として、アウリハンはジブシルを中心にセレンリ周辺に留まった集団と、トゥル・アデを中心に西方に積極的に移動をつづける集団に地理的に分かれることになった。後者はアブディラフマン・ムルサルの権威からあからさまに距離を置くようになり、1914年のマレハン派兵時にはワフェテ、アフガブとともに政府に協力するのを拒否している。

1910年代の中頃、アウリハンはイギリスの威信を揺るがす事件を立て続けに起こしている。まず、1915年の12月にワジアとロリアンの中間を占めていたセクションがサンプルを急襲した。この襲撃はかなり激しいもので、サンプル側は54人の死者を出し、数千頭におよぶ家畜を失った。翌年2月にセレンリで発生した事件は、政府にさらなる衝撃を

↗ 辺の主要なクランの規模をリストアップした表にアウリハンは含まれていない。そのため、アウリハンの流入が加速したのは1913年末以降と考えられる (KNA/DC/WAJ 1/3/1: 'Political Record Book, Wajir District')。

41) KNA/PC/NFD 4/6/1: 'Notes on the Aulihan and the Attached Tribes', author and date unknown.

与えた。およそ500人のアウリハンが夜半にセレンリの行政府に攻撃を仕掛け、警備兵とともに県長官のフランシス・エリオットを殺害したのである。この襲撃を主導したのがアブディラフマン・ムルサルで、政府に対する不満の蓄積に加えて、エリオットがライバルのマレハンに肩入れしていると考えていたことがその背景にあったとされる (Simpson 1999)。

これらの事件の報を受けた政府は、当初はアウリハンの政治的な動態の複雑さを認識していなかった。そのため、ダルヴィーシュのような組織化された大規模な軍事蜂起が起こっているのではないかという懸念から、政府はただちに部隊を派遣する決断を下すことができなかった。しかし、実際にはこれらの事件はアウリハンのサブクランを単位とした集合的な抵抗運動などではなかった。サンプルの襲撃はおもにトゥル・アデのセクションによって引き起こされた事件であり、ジブリルの関与は限られていたのだ。逆に、セレンリの事件にトゥル・アデのセクションはほとんど加わらなかった。アブディラフマン・ムルサルは襲撃後にアウリハンのほかのセクションや、ムハンマド・ズベイル、マレハンなどの他クランに対して反植民主義的な連帯を呼びかけたが、庇護下にあったバルティリを除いて反応は得られなかった。政府もまた、アウリハンがアブディラフマン・ムルサルを中核として一枚岩でまとまっているわけではないことを次第に認識するようになり、セレンリ周辺のセクションとワジア周辺のセクションをそれぞれ「北部アウリハン」と「南部アウリハン」と呼んで区別した。1917年に入るとロリアンとセレンリにそれぞれ別個に懲罰隊が差し向けられたが、アウリハン

は団結してこれに対抗できず、鎮圧されてしまった。

4.3 北東部における領域化

サンプルの襲撃事件から軍事平定までの一連の顛末は、2つの点でアウリハンのその後の展開を大きく方向づけた。第一に、彼らはこの時期から軍事的にも政治的にも大きく弱体化した。アウリハン懲罰隊によって、多数の家畜と銃を没収された⁴²⁾。そのため、政府との戦闘によって犠牲者が出ただけでなく、その後マレハンなど近隣のクランから略奪に遭ったり、生活の糧である家畜を失ったことで餓死したりした非戦闘員も相当数いたと見られる。また、彼らはこのとき指導的な立場にあった人材も多数失った。このうち17人はアフマドゥで開かれた軍事法廷で裁かれ、8人が処刑され、9人は監獄に送られた (Simpson 1999: 24–31)。ただし、アブディラフマン・ムルサルだけは政府の追求をかくぐってエチオピアに逃亡し、そのまま歴史の表舞台から消え去った⁴³⁾。この時期以降、アウリハンがジェンナー、エリオットの殺害事件のように政府に対して暴力的な手段によって正面から歯向かうことはなくなった。

懲罰隊によってアウリハンから銃と弾薬を取り上げることに成功した政府は、1918年から翌年にかけてアウリハン以外のクランにも部隊を派遣し、武装解除を実施した。それは軍事的な抵抗の手段を奪われた屈辱的な出来事であり、その対象となったソマリの人々は今も1918年を「銃を与える (*qori gad*)」年として記憶している (Merryman 1984: 90)。

第二に、懲罰隊後に北部辺境県におけるアウリハンの領域化が進められた。その他の牧畜民と同じく、ソマリにとってリニア

42) 北部アウリハンの懲罰隊だけで28,000頭のラクダ、400丁の銃、18,000発の弾薬が没収されている (Cashmore 1965: 190)。

43) Thomas (1917: 61–62)によると、アブディラフマン・ムルサルはジュバ川を越えてイタリア領に逃亡する際、同行を拒んだアフガブの長老に対して「あなた方が私に従わないのなら、私はアウリハンを抜けてほかの集団に加わるつもりだ」と発言したという。この逸話は、アウリハンにおける彼の政治的基盤の脆弱性を物語っている。

な境界線は馴染みのない制度だった。クランやサブクランの単位の集団が特定の土地に定着し、その水場と放牧地を専有することはあったが、その状態を正当化したのは境界線や所有権といった概念ではなく軍事力だった(Lewis 1961: 31-55)。敵対的な集団のあいだで帰属が曖昧な土地は、最終的に集団間の衝突によって決着をつけるべき問題として認識されていた。また、そのように緊張状態がピークに達する前に、彼らはしばしば付近の木々にラクダの焼印 (*sumad*) を彫り付けた⁴⁴⁾。ソマリがラクダに施す焼印はセクションごとに異なっており、その行為は領有を宣告し、敵対集団を牽制することを明確に意図していた(写真8)。そして、植民地当局としては力の論理による無政府状態を看過するわけにかなかった。

このときアウリハンのテリトリーとして指定されたのが、ロリアン湿地の南側のエリアである。この地域では遅くとも1913年には少数のアウリハンの姿が確認された。彼らはアリのセクションに属しており、同年頃ワジア方面に西進してきた南部アウリハンの一部だったと考えられる。北部辺境県長官のホープは彼らの退去を何度か要求したものの、逆にその流入は止まらず、懲罰隊後は家畜や放牧地を失った人々も加えてかなりの規模に膨れ上がっていた⁴⁵⁾。当時、この地域ではムハンマド・ズベイルとアブドワクも放牧しており、その利用をめぐるしばしば衝突していた(Thomas 1917: 498-501)⁴⁶⁾。そのため、ワジア県長官のジョン・ルウェリンはアウリハンの生業空間を確保するため、1918年11

月にアウリハンのテリトリーの境界線を定めた(図6)。このテリトリーの北端部に位置していたのがハバスウェインで、モドガシとの間の道路が北東側の境界線となった。この道路の北側に広がるエワソ・ニロ川とその流域の放牧地は、ボラナが利用するものとされた。また、北西側の境界線は、ラグデラ川がその役割を果たしていた。南側では、モドガシ、ゴリアレ、ウドレ、サティサという、間欠河川に井戸が掘られた地点をむすぶラインが境界線として指定された。アウリハンの南側をテリトリーとするアブドワクは、衝突を避けるためにそれらの井戸の利用を禁じられた。行政区画としては、ワジア県の管轄とされた⁴⁷⁾。

ここで注意する必要があるのは、北部辺境県の当局にとってこの領域化は「暫定的な措置」に過ぎなかったという点である⁴⁸⁾。というのも、彼らはこの決定と平行して政府の対ソマリ政策を全面的に見直していたからである。

ソマリに対する経過観察の方針が早くから限界を露呈していたことは、4.2の冒頭で述べたとおりである。その後、この方針をどのように修正するのかについてイギリス本国、ケニアの中央政府、そして現場の行政官と軍人のあいだで何度か議論が交わされたものの、意見の統一を見ていなかった。その間もオガデン・クランを中心にソマリの流入は続いており、彼らをいかにして止めるのかはボラナ、アジュラン、サクイエ、ガブラなどの先住民族を保護するという点からも、政府にとって喫緊に解決すべき課題だった。そして、アウリハン平定作戦の指揮をとったハロ

44) KNA/PC/NFD 4/2/2: District Commissioner, Tellemugger to Officer in Charge, NFD, 1 October 1923.

45) KNA/DC/WAJ 1/3/1: 'Political Record Book, Wajir District', 1929; KNA/PC/NFD 4/2/2: Senior Commissioner, NFP to District Commissioners, Wajir, Tellemugger, and Garba Tulla, 14 June 1928.

46) 1914年にはアブドワクとアウリハンの連合がムハンマド・ズベイルと激しい戦闘を繰り広げた。その犠牲者があまりに多かったことから、この戦いは「血の池 (*war dhiig*)」と呼ばれている(Merryman 1984: 88-89)。

47) KNA/PC/NFD 4/1/4: Officer in Charge, Wajir to Officer in Charge, NFD, 14 September 1923.

48) *ibid.*

ルド・キッターマスターなど一部の上級行政官は、作戦の成功によってイギリスの威信と軍事的な優位を示したことでこの問題に決着をつける好機が訪れたと考えた⁴⁹⁾。このとき彼らが共有していたのが、問題の根幹はソマリの居住域がジュバランド州と北部境界に跨っていることにあるという認識である。そこで、彼らは「ソマリ居留地 (Somali Reserve)」と呼ばれる構想の実現に向けて議論を重ねていった。この案は、2つの行政区画を統合し、一元化された指示系統のもとでソマリの問題に取り組むというものだった⁵⁰⁾。その細部については行政官によって意見が分かっていたものの、オガデンのサブクランをジュバランドのテリトリーに差し戻す必要があるという点ではおおむね一致していた。それが実現した暁には、ワジアなど北部境界の放牧資源をめぐる過密状態が解消されるとともに、ジュバランドの安定化によって経済開発の道筋が開かれることも期待されていた (El-Safi 1972: 66-72)。

ソマリ居留地の案を実現するために、それぞれ北部境界とジュバランド州の長官を務めていたキッターマスターとホープは1919年にある方針を打ち出した。それは、すでにタナ川流域に定着していたアブドワクとアブダラーを除いて、すべてのオガデンのサブクランを漸進的にジュバランドのものとテリトリーに押し戻すというものだった⁵¹⁾。彼らがその手始めとしてターゲットにしたのが、ワジア周辺に定着していたムハンマド・ズベイルである。3.3で述べたように、ムハンマド・ズベイルの多くはラクダをおもに飼育しているものの、一部のセクションはウシ飼育を中

心としていた。そして、後者にとって乾燥度の高いワジアは必ずしも望ましい放牧環境ではなかった。この点に目を付けたキッターマスターはルウェリンに指示を出し、ムハンマド・ズベイルのウシ牧畜民をアフマドゥの周辺に移住させた。

この方針に従うならば、アウリハンは一時的にロリアン湿地の周辺で放牧を許可されているとはいえ、いずれはジュバランドのセレンリ周辺のものテリトリーに送還されるはずだった。現に、キッターマスターはアウリハンに自発的に帰還するよう再三求めたが、彼らはこの要請に応じなかった。結果的に、この帰還が強制的に実施されることはなかった。もともと、すべての政府高官がオガデンを強制送還する計画に肯定的だったわけではなく、それが引き起こしかねない政治的な混乱を懸念する声もあがっていた。そして、1919年のうちにキッターマスターが北部境界の長官の職を離れると慎重派の意見が優勢となった。この流れを決定的なものにしたのが、イタリアに対するジュバランドの割譲である。この措置は、第一次世界大戦中にイギリスとイタリアのあいだで交わされた密約を踏まえたものだった (Hess 1966: 156-159)。割譲が正式に実現したのは1925年6月のことだが、それに向けた両国間の交渉は1919年からおこなわれており、そのことは現場の上級行政官にも伝わっていた。ジュバランドがイタリアの手に渡ればソマリ居留地の構想も断念せざるを得ないと考えた彼らは、1920年10月に開催した会議の場で南部アウリハンをそのままケニアに留めるという決定を下した⁵²⁾。この決定は、アウリハ

49) KNA/PC/NFD 4/1/1: Officer in Charge, NFD to Chief Secretary, 10 December 1910; KNA/PC/NFD 4/1/4: Officer in Charge, NFD to Chief Secretary, 10 April 1918.

50) 同様の構想はサルケルドや、北部境界の長官を務めたホープやサミュエル・デックらによって第一次世界大戦以前から提起されていた (Thomas 1917: 129-131, 166-171)。ただし、議論が本格化したのは大戦後のことである。

51) KNA/PC/JUB 1/4/7: 'Memorandum on the Ogaden in the NFD' by H. Kittermaster, 20 November 1920.

52) KNA/PC/JUB 1/4/7: 'Memorandum of a Discussion Took Place on 6th November, 1920'.

ンのテリトリーがイギリスとイタリアという二つの主権領域に公式に分かれることを意味していた。

5 多孔的な境界線

5.1 領域化の失敗

上記の経過を受けて、ルウェリンが暫定的な措置として定めたアウリハンの境界線はその後引き継がれることになった。しかし、容易に想像されるようにこの境界線は彼らを周囲の集団から隔てるという意図された機能を十分に果たすことができず、有名無実化していった。その背景としては、いくつかの理由を挙げることができる。まず指摘すべきなのは、生態的な理由である。前述のように、この境界線は懲罰隊後に行き場を失った南部アウリハンのために急場をしのごく目的で引かれた経緯がある。したがって、それは生業牧畜の季節的なリズムや環境の変化を踏まえたものではなかった。このテリトリーにはモドガシやゴリアレなどの井戸や、ロリアン湿地が含まれていたものの、井戸の水量は乾季を通して多数の家畜に給水できるほど豊富なものではなかった。また、3.3で述べたようにロリアン湿地も毎年の乾季に安定的に利用できるとは限らなかった。早魃が起こって湿地が干上がり、井戸水が枯渇すると家畜は行き場を失い、飢餓がもたらされた⁵³⁾。そのため、早くも1922年8月にはルウェリンによって早魃の期間のみタナ川を利用する許可が与えられた。この前例はルウェリンのあとのワジア県長官にも踏襲され、アウリハンは早魃の

度にタナ川のほかにエワソ・ニロ川やワジアの井戸群に家畜とともに移動した⁵⁴⁾。

反対に、アウリハンのテリトリー内の生態資源が周辺の集団を引き付けることもあった。アウリハンのテリトリーと南側で境界を接していたアブドワクはそのひとつである。アブドワクの大半はウシ牧畜民であり、彼らがおもに占めていたタナ川左岸のテリトリーはその放牧に適した環境だった。ただし、アブドワクのすべてのセクションがウシ牧畜を中心としていたわけではなかった。その主要なセクションのひとつはラクダに大きく依存しており、彼らはゴリアレやウドレの周辺の乾燥度の高い放牧地を必要としていた。そのため、彼らはしばしば合意を無視してそれらの井戸を利用し、アウリハンと諍いを起こした⁵⁵⁾。

次に挙げるべきは、法的な理由である。南アフリカと同様に、ヨーロッパ人の入植者を受け入れていたケニアでもアフリカ人から土地と労働力を収奪する目的で20世紀初頭に原住民居留地 (Native Reserves) の制度が導入されていた。その境界線はしばしばないがしろにされたり、時間の経過とともに曖昧になったり、集団間の衝突の火種となったりした。しかし、居留地の場合は少なくともどこに境界線が引かれたのかは官報に公示されており、その維持のためにアフリカ人を動員して境界標を設置するなど、法的な権限が行政官に与えられていた⁵⁶⁾。他方で、北東部は気候が厳しく、大規模な換金作物の生産に適していないことから、その土地も労働力も入植者から求められることはなく、ごく一部を

53) 早魃の影響の程度は地域ごとに大きく異なる。ロリアン湿地の場合、1928年に起こった早魃がとくに深刻だった。このときに家畜の80から90パーセントが失われ、同時期に流行した肺炎と飢餓のために多数の人々が亡くなったという (KNA/PC/NFD 4/2/2: District Commissioner, Wajir to Provincial Commissioner, NFP, 22 December 1928)。

54) KNA/PC/NFD 4/1/4: Officer in Charge, Abd Wak to Officer in Charge, NFD, 2 August 1922; KNA/PC/NFD 4/2/2: District Commissioner, Wajir to Senior Commissioner, NFD, 20 July 1927.

55) KNA/PC/NFD 4/2/2: Officer in Charge, Tellemugger to Officer in Charge, NFD, 1 October 1923.

56) KNA/PC/NFD 4/2/2: Chief Native Commissioner to all Provincial Commissioners, 8 September 1927.

除いて原住民居留地が設置されなかった。そのため、アウリハンのテリトリーを含めて北東部では各集団への放牧地の配分は法的な正当性に依拠しておらず、完全に現場の行政官の裁量に委ねられた⁵⁷⁾。そして、その対応にはおのずと限界があった。

この点と関連して、行政的な理由も指摘することができる。アウリハンのテリトリーに限らず、北東部の行政官は人的、財政的な資源の制約の問題に絶えず頭を悩ませていた。彼らは当初、キッターマスターによって掲げられた方針に従ってソマリの移動を厳格にコントロールする必要があると考えていた⁵⁸⁾。とはいえ、この動きを完全に止めるのは現実的な選択肢とは言えなかった。というのも、行政官がワジアの県庁から遠く離れたこの地域を頻繁に巡回するのは難しく、現地人の警備隊を常駐させる体制も整っていなかったからである。彼らがこの問題について強硬な姿勢で臨もうとしたところで、その余裕はなかったのである⁵⁹⁾。

もうひとつの行政的な背景には、この時期に当局のアウリハン支配に協力したある媒介者の存在がかかわっていた。それがヒロレ・モハメドである。彼は、筆者がアウリハンの長老に植民地期について聞き取り調査をした際に必ずと言っていいほど名前が挙がっていた重要人物である。ただし、ワフェテ・セクションの出身であるという点を除いて、彼の初期の経歴については謎が多い。聞き取り調査では、ヒロレ・モハメドについて「幼少期に奨学金を得てミッションナリーの学校で学び、のちにイギリスに留学した」や「青年期

までイギリスで過ごし、帰国後はモヤレで県長官を務めた」などの語りが聞かれた⁶⁰⁾。これらの語りはそれ自体として興味深いものの、20世紀初頭の時点で渡英の機会を得たオガデンのソマリがいたとは考えにくく、行政資料にもそのような記述は見られない。資料から確認できるのは、アブディラフマン・ムルサルがスルターンの地位にあった時期にヒロレ・モハメドがアウリハンの首長のひとりだったことである。また、資料では彼の名前はアブディラフマン・ムルサルの「代理人」として言及されている。このことから、同じワフェテの出身者であるアブディラフマン・ムルサルとの関係は、少なくともその初期には近かったのではないかと推察される⁶¹⁾。別の行政資料からは、ヒロレ・モハメドがモヤレの国境警備隊でおよそ15年間勤務した経験を持つこと、そしておそらくその間に英語を習得し、通訳としても重宝されていたこともうかがい知ることができる⁶²⁾。以上のことから、筆者が収集した彼に関する語りは歴史的事実としてではなく、彼の能力と権威がイギリスとの結びつきにおいて理解されてきたことを示唆する資料として解釈されるべきだろう。

ヒロレ・モハメドの経歴においてとくに興味深いのが、前述のようにアウリハンへの懲罰隊派遣後にその指導層の多くが逮捕、処罰されたにもかかわらず、彼がその対象に含まれていなかったという点である。それどころか、彼とその一味はワジア県長官のルウェリンによって、アウリハンのテリトリーの西側に位置するガルバトゥーラやベナネの周辺で

57) KNA/PC/NFD 8/1/1: Provincial Commissioner, NFP to Attorney General, 27 August 1929.

58) KNA/PC/NFD 4/1/7: District Commissioner, Wajir to Senior Commissioner, NFP, 22 March 1926.

59) KNA/NFD 8/1/1: 'Minutes of the District Commissioners' Meeting from 20th to 23rd August, 1929'.

60) インタビュー(マフムード・マーリム, モドガシ, 2010年10月20日; フセイン・ゴール, モドガシ, 2010年10月23日)。

61) KNA/PC/NFD 4/6/1: 'Notes on the Aulihan and the Attached Tribes', author and date unknown.

62) KNA/PC/NFD 2/1/1: 'Northern Province Handing Over Report, 1925'.

放牧する許可を付与された。それは乾季のあいだのみ有効とされた特権だったが、彼らは降雨のあともそこを立ち去らず、事実上定着した⁶³⁾。問題はなぜ彼がこのような厚遇を受けたのかだが、まず、少なくともセレンリの襲撃事件が起こる前にはアブディラフマン・ムサルから距離を置いていたと見られる。また、英語はもちろんスワヒリ語の話者も限られていたケニア北東部では彼のような通訳者は貴重な人材だった。そのため、彼に用意された放牧地はその貢献に対する相応のリターンだったという理解は可能である⁶⁴⁾。ただし、これらの点を勘案したとしても、行政当局によるヒロレ・モハメドの処遇の特異性は際立っている。このことから、ルウェリンが1917年に派遣されたアウリハン懲罰隊の指揮を執った際に彼が何らかのかたちで協力した可能性は高いと考えられる⁶⁵⁾。いずれにせよ、政府のお墨付きを得てアウリハンのテリトリーの外部を移動していたヒロレ・モハメドの存在は、境界線を攪乱し、その管理をさらに複雑なものにしたのは確かである⁶⁶⁾。

境界線に機能不全をもたらした別の背景としては、国境の問題もあった。3.3で述べたように、19世紀末からイギリス領とイタリア領の境界線として機能してきたのはジュバ川だった。ジュバランド割譲の決定はこの状

況に変化をもたらす契機となったものの、新たな国境をどこに引くのかについては両国で主張が分かれており、外交交渉が続けられた(Bruzzone 2019: 70–76)。交渉の末に、東経41度付近を南北に走る人工的なラインが国境として合意されたが、その実態は長距離にわたって低木を除草し、コンクリート製の境界標をとこところに敷設したものに過ぎなかった(King 1928)。さらに、この状態すら適切に維持されておらず、その整備から数年後には草木が生い茂って見えにくくなり、境界標の一部も破損するほどの有様だったという。国境の監視を担っていたのはケニア側では警備隊、イタリア側ではバンダと呼ばれる現地雇用兵だったが、いずれもその規模は限定的だった。とくに後者はときに政府によるコントロールを逃れ、ケニア領内で略奪を繰り返すこともあった⁶⁷⁾。

このような状況では、「イタリア臣民」としてカテゴリー化されたソマリの集団が水場と放牧地を求めて数百人から、ときに数千人の単位でケニア側になだれ込んできても、北東部の行政当局にそれを止める術はなかった。図6で示したように、ケニアでアウリハンに認められたテリトリーは国境に直接接していたわけではなかったが、ジュバランドからアフガブなど北部アウリハンのセクショ

63) KNA/PC/NFD 4/1/4: Officer in Charge, Southern Boran to Officer in Charge; Officer in Charge, Telemugger to Officer in Charge, NFD, 26 June 1923; KNA/PC/NFD 5/1/7: Acting Senior Commissioner, NFD to Act District Commissioner, Wajir, 10 April 1926.

64) ケニア北東部の植民地行政における現地人通訳者の重要性と地位の高さを示しているのが、アラブ人のモハメッド・スーダンの事例である。1896年に王立アフリカ銃隊に料理人として雇用された彼は、次第に言語の才能を開化させて通訳としてウガンダやソマリランドの遠征に同行した。その後は北部辺境県の州政府に配置換えとなり、通訳として活躍した。彼は方言を含めて11の言語に通じており、日々の業務のなかで現地の多様な言語集団とコミュニケーションをとっていた行政官にとって不可欠な存在だった(Dutton 1944: 19–21)。政府もその功績を認め、1936年に彼に大英帝国勲章を授与している。

65) この点については、行政資料の調査でも聞き取り調査でも直接的な裏付けは得ることができず、推測の域を出ていない。ただし、ある報告書でも「ヒロレの政府に対する忠誠心が高かったため、ソマリ内で不興を買った」と説明していることから、移住の背景に同族の反発を招く何らかの出来事があったのは確かだろう(KNA/PC/NFD 2/1/1: 'Northern Province Handing Over Report, 1925')。

66) KNA/PC/NFD 4/2/2: District Commissioner, Wajir to Senior Commissioner, NFP, 14 March 1928.

67) KNA/DC/WAJ 4/2: 'Third King's African Rifles Intelligence Report No. 17 of October 1929'; 'Third King's African Rifles Intelligence Report No. 18 of November 1929'.

ンが流入してきた⁶⁸⁾。このことはテリトリー内の放牧資源をめぐる競争に拍車をかける結果となったが、当局はそれを黙認せざるをえなかった。というのも、彼らが同じアウリハンとして系譜と家畜の焼印を共有している以上、形式的にイギリスとイタリアのいずれに帰属しているのかを見分けるのは事実上不可能だったからである。さらに、彼らはケニア側に移住したあともジュバランドのアウリハンとのつながりを維持していた。ケニア側で殺人を犯したり、近隣の集団を襲撃して家畜を奪ったりしたアウリハンはこのネットワークを活用し、セレンリの周辺に逃亡しているという噂は、行政官の耳にも入っていた⁶⁹⁾。しかし、イタリア側の政府が全般的に境界領域のコントロールについて消極的だったこともあり、北東部の当局としてはやはりその動きを取り締まることができなかった。

5.2 間接統治

前項で述べたいくつかの要因を背景として、北東部の行政当局にとってアウリハンをテリトリー内に留めるという課題は、1920年代を通してますます困難になった。北東部は入植が進んでいた標高の高いエリアから遠く離れており、したがって、彼らの越境が入植者の利益を直接的に損なったわけではなかった。とはいえ、公的に定められた境界線が有名無実化することは政府の威信を揺るがしかねない事態であり、領域的なコントロールを放棄するという選択肢はとりえなかった。そこで、関係する行政官のあいだでこの問題への対応策が講じられた。

協議のすえにワジア県長官が持ち出したのが、アウリハンのテリトリーの西側に当たる、図6で薄い灰色によって表示した部分を新たに追加するという案である。この提案は北部州長官によって了承されたうえで、1927年7月にモドガシで開催された会合の場でスルターンのアデン・ハッサンとその他の長老に伝達された。

興味深いことに、提案はアウリハンによって拒絶された。それだけでなく、「この申し出が再び繰り返されることがないように求められた」⁷⁰⁾。行政文書では、この宥和的な提案がここまで強い反発を招いた理由は明確に述べられていない。ただし、テリトリーの拡大の条件として新たな境界線の周辺を除草し、境界標を設置する作業が求められたことと関係しているという推測は容易である。この要求の狙いが、境界線の変更にとまらぬ労力を軽減することにあつたのは言うまでもないだろう。しかし同時に、その背後には肉体労働を通じてリニアな境界線という彼らにとって馴染みのない制度を浸透させるという別の目的もあった。実際に、ケニアの他地域でも境界線がないがしろにされたり集団間の諍いの種になったりするケースが頻発しており、中央政府は各州の当局に対して様々な手段によって境界線の存在を可視化し、その意味を教え込み、馴致させるよう指示していた⁷¹⁾。そして、この要求はアウリハンをはじめとするソマリの牧畜民が家畜を価値の中心とし、放牧以外の肉体労働に忌避感を示すことを計算に入れていなかった。結局のところ、彼らにとって境界線は強いて遵守しなければなら

68) KNA/PC/NFD 4/1/7: Acting District Commissioner, Wajir to Resident, Serenli, 17 August 1927; Acting District Commissioner, Wajir to Acting District Commissioner, Garba Tulla, on 2 March 1928.

69) KNA/PC/NFD 3/2/1: 'Wajir District Intelligence Report for November, 1931'; 'Wajir District Intelligence Report for March, 1932'.

70) KNA/PC/NFD 4/2/2: Acting District Commissioner, Wajir to Senior Commissioner, NFP, 20 July 1927; Senior Commissioner, NFP to District Commissioners, Tellemugger, and Garba Tulla, on 14 June 1928.

71) KNA/PC/NFD 4/2/2: Chief Native Commissioner to all Provincial Commissioners, 8 September 1927.

ないものではなく、必要ないつでも越境してきたのである。

この解決策には、行政官からも反対の声が上がった。当時はキクユなどほかの民族でもテリトリーの過密問題が持ちあがっており、政府内には安易な譲歩がもたらしうる政治的な帰結への警戒感があつた（Coldham 1978）。とくにワジア県に隣接し、アブドワクのサブクランの行政を管轄していたブラ県長官のマーティン・マホニーは、この案に強い異議を唱えた。というのも、アウリハンのテリトリーの拡大はアブドワクから土地を奪うことにつながったからだ。彼の目にこの措置は、それまで政府に対して相対的に従順な姿勢を示し、乾季の際にはアウリハンがその水場を利用することを許容してきたアブドワクを不当に罰するものとして映った⁷²⁾。

結果的に採用された方策はアウリハンのテリトリーを広げるのではなく、その行政をワジア県からガリッサ県に移管するというものだった⁷³⁾。それは、ともにオガデンのサブクランに当たるアウリハンとアブドワクの放牧地問題に一元的に対処することを意味していた⁷⁴⁾。その狙いは、彼らの移動を強制的にコントロールするのが事実上不可能な状況下で、それを特定の方向に水路づけることにあつた。行政当局にとって、アウリハンによる越境行為が避けられない事態なのであれば、その相手が系譜上の距離が遠いサブクランやソマリ以外の民族であるよりも、同じオガデンのほうが望ましかったのである。この決定によって、具体的にはアウリハンが乾季に水場を必要とする場合にはワジア県に位置する井戸群やエワソ・ニロ川ではなく、ガ

リッサ県内のタナ川の利用が促された。反対に、アブドワクがラクダの放牧地の確保に窮した際には、アウリハンのテリトリー内の乾燥地の利用が認められた。そのような越境行為そのものは以前から見られたものだったが、この変更によって緊急時にのみやむを得ず許容される例外的な事態ではなく、ガリッサ県長官による監督のもとで両者の集団のあいだで調整されるべき問題として位置づけなおされた。この措置は、集団間の放牧地配分の問題には「ある程度柔軟に」対処する必要があるという北部辺境県全体の方針にも沿っていた⁷⁵⁾。

また、アウリハンのガリッサ県への移管にはガリッサ県当局の移動性を高めるという利点もあった。インフラ整備が進んでいないケニア北東部ではラクダがおもな移動や輸送運搬の手段だったが、ウシ牧畜民の多いガリッサ県ではその確保が困難だった。そして、ラクダ牧畜が主体のアウリハンを管轄に含めることによって調達が容易になると見られていた⁷⁶⁾。

柔軟な境界線の運用においてキーパーソンとしての役割を期待されたのが、首長（スルターン）である。3.3で述べたように、植民地政府は初期からソマリのスルターンを統治に用いていた。その活用の範囲はケニアのその他の地域と比較すると限られていたものの、軍事平定と領域化を経て、徴税の補助や紛争の調停など役割を拡大していった。境界線の管理もそのひとつだった。その他の無頭的な社会と同様に（Tignor 1971）、行政官はスルターンの権威がつけねに絶対的なものではないことを認識していたし、彼らの職務を補

72) KNA/PC/NFD 4/2/2: Assistant District Commissioner, Tellemugger, to Provincial Commissioner, NFP, 28 November 1927.

73) 1.2で述べたように、ブラ県は1931年にガリッサ県に名称を変更した。

74) KNA/PC/NFD 8/1/1: 'Minutes of District Commissioners' Meeting Held in the Provincial Commissioner's Office on 20th August, 1929'.

75) *ibid.*

76) KNA/PC/NFD 4/2/2: District Commissioner, Wajir, to Provincial Commissioner, NFP, 25 March 1929.

助するために人員や予算を割くこともなかった。それでも、当局はスルターンを通して初めて間接統治のチャンネルを確保し、境界線を管理下に置くことができた。1934年に制定された特別県（行政）令は、この文脈で重要な意味をもつ。強権性によって知られるこの法令の第13条は、ケニア北東部の行政官に紛争解決の手段として当事者集団に保証金（bond）を設定する権限を付与するというものだった。当局はこの条項に依拠して、常習的な越境がおこなわれていれば当事者集団の首長を招集して話し合いの場を設け、次にそのような行為が発覚した場合に支払われる違反金を設定することができた⁷⁷⁾。この法令が実質的にどの程度境界線の維持に有効だったのかは留保する必要があるが、少なくとも管理の体裁をなすのに寄与したとは言えるだろう。

アブドワクとアウリハンの境界線の調整役を担った二人のスルターンの経歴は、ある意味で対照的だった。前者のスルターンだったのが、スタンブル・アブディである。彼がその地位に就いたのは、アブドワクがジュバランドからタナ川への移住を進めていた1910年頃とされる（Thomas 1917: 43）。彼はアブドワクのなかでもっとも有力なウレッドというセクションの出身者で、老衰によって亡くなるまで長年にわたって人々からの支持が揺らぐことはなかった。彼の在任中、アブドワクはソマリのほかのサブクランのなかでも政府に対しておおむね協力的な態度を示したことから、行政官からも重宝されていた。植民地総督のロバート・コリンソンに直接面会し、陳情をおこなうという例外的な機会が与えられたのは、信頼の厚さの証左であった⁷⁸⁾。

興味深いのは、この時期にアウリハン側のスルターンを務めたのがヒロレ・モハメド

だったという点である。彼が行政当局から厚遇を受け、ボラナのテリトリーで放牧する許可を得ていたことは5.1で指摘した通りである。当局は彼と行動をとる者にもこの権利を認めており、グループのリストを提出させることでその動向を監視下に置こうとした⁷⁹⁾。しかし、この目論見はうまくいかなかった。というのも、アウリハンのテリトリー内の放牧資源をめぐる競争が激しくなるにつれて、監視の目の届かないところで彼のもとに合流する者が増えていったからである。ある行政官は北部辺境の長官に宛てた書簡のなかで、この状況を次のように嘆いた。「（ヒロレ・モハメドとは）別の集落はヒロレについて行ったり、彼に家畜を渡して買取したりするだろう。ヒロレが政府に雇用されて以降、彼の親族を名乗る者は驚くほど多くいるのだ⁸⁰⁾。彼は政府との距離の近さを最大限に利用することで、集団内で首尾よくみずからの勢力を拡大した。そして、それはアウリハンのケニア移住後にスルターンになっていたアデン・ハッサンの権威が弱体化することにもつながった。アデン・ハッサンは最大セクションのアリの出身者で、ハッサン・ワルファの息子でもあり、血筋の点では申し分なかった。もっとも、そのことは彼の長期的な在位を保障しなかった。1932年の中頃にはヒロレ・モハメドがスルターンの椅子を狙う様子を見せたが、その頃にはアウリハンのおよそ半数がアブディ・ハッサンから離反し、前者が拠点としていたベナネの周辺に集っていたという⁸¹⁾。当局としても有能で、協力的で、英語によるコミュニケーションが可能な媒介者がカウンターパートなのは好都合であり、この動きを止めなかった。政府の境界線政策をつねに攪乱してきたこの人物が、まさ

77) KNA/PC/NFD 2/3/1: 'Garissa District Handing Over Report, 1938'.

78) KNA/PC/NFD 4/1/7: Stamboul Abdi to Governor of Kenya Colony, 7 November 1924.

79) KNA/PC/NFD 4/1/4: 'List of Hiloli Mohamed's Village, January 1922'.

80) KNA/PC/NFD 4/1/4: Officer in Charge, Southern Boran to Officer in Charge, NFD, 14 August 1922.

81) KNA/PC/NFD 3/2/1: 'Wajir District Intelligence Report for the Month of August 1932'.

にその行為によって境界線の守護者の地位にまで昇りつめたのは皮肉なことだった。

上記のような過程を経て、ヒロレ・モハメドがアウリハンの人々の推戴を受けてスルターンに就任した1933年に、「アウリハンとアブドワクのあいだの境界線（問題）は終結した」⁸²⁾。この年以降、両者のサブクランの放牧地は徐々に県内で徐々に混じり合ってしまったという。混淆そのものは政府の不介入がもたらした無秩序ではなく、柔軟な境界線管理の政策によって企図された状態であった。とはいえ、それとともに生じたいくつかの問題は当局が想定したものではなかった。第一に、スルターンがアウリハンとアブドワクの放牧地配分のキーパーソンとして位置づけられたことで、両者の集団間の関係がヒロレ・モハメドとスタンブル・アブディのあいだの個人的な関係に大きく依存することになった。二人の関係は流動的で、友好的な時期もあれば互いに敵対的な姿勢をとることもあった。彼らの仲が悪くなると、水場をめぐる小規模な小競り合いがサブクラン間の全面的な衝突に発展しかねなかった。そのため、当局は彼らの関係の推移をつねに注視し、悪化の兆しがあれば両者を招集して保証金を設定し、歯止めをかけようとした⁸³⁾。

第二に、アウリハンのテリトリーがガリッサ県に組み込まれたあとも、他の県やイタリア領ソマリランドの集団との越境行為は止まらなかった。とくに、ムハンマド・ズベイルやマレハンなどオガデンのサブクランの土地で放牧地が不足したときには、彼らを被護者（シェーガット）として迎え入れた。逆に、アウリハンの側がムハンマド・ズベイルやマレハンのテリトリーに一時的に滞在すること

もあった⁸⁴⁾。当局はシェーガットの慣習を問題視したものの、それを完全に規制するのは不可能だった。19世紀後半に形成されたカブララの連合体はこの時期には解体されていたとはいえ、サブクランの垣根を越えた集団間の紐帯は依然として維持されていたと言える。

政府のコントロールを逃れて越境しつづけたのは、人間と家畜だけではなかった。ケニア北東部では20世紀の初頭から、ゾウやヒョウを密漁し、その牙と皮をイタリア領の沿岸部に輸出する闇取引のネットワークが確立されていた（Dalleo 1979）。そして、アウリハンのテリトリーは乾季に野生動物を引きつけるロリアン湿地を含んでいたこともあり、その交易圏の一部を形成していた。ガリッサ県の当局はヒロレ・モハメドを通じてその取り締まりを試みたものの、徒勞に終わった。一部の行政官は彼自身が取引に関与し、利益を得ている可能性があるとして見ていた⁸⁵⁾。

また、思想的な流動性も重要な点である。19世紀にジュバ川の流域でイスラームの改革主義運動が盛り上がり、アウリハンをはじめとするダロード系のソマリの移住を促進する役割を果たしたという点については、本論の3.2で述べた。アウリハンのあいだでとくに強い影響力をもっていたのが、サーリヒー教団である。この教団の指導者であるシェリフ・サイード・アリ・ビン・モハメドがアウリハンの西側のボラナのテリトリーに位置するガルバトゥーラに拠点を置いたのは、1921年のことだった。彼らは次第にソマリ内で支持を拡大し、参詣のための寄付を募る活動をおこなった。彼らは改革主義と反植民地主義運動の結びつきを警戒する政府によってイタリア領に追放されたものの、1937年

82) KNA/PC/NFD 4/1/10: 'Note for District Records: Inter Tribal Affairs Aulihan - Abd Wak', District Commissioner, Garissa, 22 November 1939.

83) *ibid*; KNA/PC/NFD 2/3/1: 'Garissa District Handing Over Report, 1940'.

84) KNA/PC/NFD 2/3/1: 'Garissa District Handing Over Report, 1946'; 'Garissa District Handing Over Report, 1956'.

85) KNA/PC/NFD 5/1/7: Officer in Charge, NFP to Chief Native Commissioner, 18 October 1926; NAUK/FCO 141/5717: 'NFD Intelligence Report for the Month of April 1942'.

頃にケニアに再び足を踏み入れた。狩猟品の闇取引の場合と同様に、ヒロレ・モハメドはシェリフ・アリの活動に対する政府のコントロールに協力すべき立場にありながら、密かに彼の教えを支持していたとされる⁸⁶⁾。行政官の側でもそのことに気づいていたものの、彼に比肩する資質と統率力をもつ者はほかにおらず、黙認せざるを得なかった。

5.3 ヘールとしての境界線

それでは、ここまで述べてきたように植民地期に設定、運用されていた境界線は、アウリハンの人々にとっては政治的な意味でどのような出来事だったのだろうか。本章の最後に、おもに筆者が収集した口述資料に依拠しながらこの点を考察する。

現在、アウリハンの人々はモドガシを中心地としている。普段スルターンはこの街に滞在しており、大小様々な紛争を解決するためのシールはここで開かれる。聞き取り調査によって確認された彼らのテリトリーは、1918年にルウェリンによって定められたものとおおむね一致していた。筆者が過去の領域化の経緯について長老たちに質問をおこなったところ、ある興味深い発見があった。それは、ヒロレ・モハメドこそがアウリハンの境界線についてスルターンとして最初に植民地政府と交渉し、確立したとされており、そのことが共通の認識となっていたという点である。しかし、行政文書から確認される限り、アウリハンに境界線が引かれたときにスルターンの地位にあったのはアデン・ハッサンだった。また、そのあとにスルターンに就いたヒロレ・モハメドの時期には、むしろガリッサ県におけるアウリハンのテリトリーはより曖昧になっていたはずである。それは、

人々の記憶と行政文書のあいだに隔たりがあることを示している。

ここで議論すべきなのは、口述資料の内容が文字資料と照らし合わせたときにどの程度妥当なのかではなく、むしろその隔たりが何を意味するのかという問題だろう。この点で注目に値するのが、境界線がヒロレ・モハメドによってアウリハンの内外で合意された政治的事項のひとつとして位置づけられている点だ。そのほかに彼によって決定された重要な事項としては、血償の額が挙げられる。ソマリの社会では、誰かが侮辱されたり殺傷されたりした場合には、当事者の集団で話し合って決められた頭数の支払うことによって紛争を解決する。近年では、この支払いは家畜に相当する額の現金によってなされることも認められている。この慣習は血償と言われるものであり、ソマリ語では「血」を意味する「ディーグ (*dhiig*)」と呼ばれる。血償の額には相場があり、男性が殺害された場合にはラクダ100頭によって、女性が殺害された場合にはラクダ50頭によって償うのが通例とされる。暴行によって歯が一本抜けた場合には、5頭のラクダが支払われる。しかし、それらはあくまで標準の頭数であり、実際に何頭によって賠償とするのかは当事者集団間で取り決められる。また、標準額が支払われるのは当事者が異なるサブクランやクランに属している場合であり、同じサブクラン内の紛争では血償は減額される⁸⁷⁾。その額もやはり話し合いによって決定されるのだが、現在に至るまで標準とされているアウリハン内の血償は、ヒロレ・モハメドの取りまとめによって合意された額を基準としているという⁸⁸⁾。このように集団内の合意に基づいた手続きを、ソマリ語でヘール (*heer*) と呼ぶ。政治

86) KNA/PC/NFD 2/3/1: 'Garissa District Handing Over Report, 1939'; KNA/PC/NFD 5/1/7: Officer in Charge, Wajir to Senior Commissioner, NFP, 2 October 1925.

87) なお、殺人事件の当事者が同じ血償集団に属しており、近い血縁関係にある場合、血償は支払われない。このようなケースでは、加害者の集団の者が被害者の集団に一頭のヒツジを引き渡すことで償う。これを「ヒツジが閉じる (*saween her*)」という。

88) インタビュー (フセイン・ゴーレ, モドガシ, 2010年10月23日)。

構造との関連を念頭に置くならば、ヘールには集団の成員を結合する機能があると言える。そのため、ヘールは父系出自（トル）と並んでソマリの基底的な社会原理として理解されてきた（Lewis 1961: 127-195）。

ヒロレ・モハメドによって境界線をはじめとするヘールが締結されたという人々の記憶が示唆しているのは、彼のイニシアティブのもとでアウリハンに集合性が再形成されたということである。重要なのはその文脈である。アウリハンの長老たちの語りでは、ヒロレ・モハメドがいかに指導者として優れていたのかが称賛され、それまで混乱していたアウリハンの政治状況に秩序をもたらした功績が度々強調された⁸⁹⁾。一例を挙げると、まだアデン・ハッサンがスルターンだった頃、彼の統治に不満を抱いた人々がモヤレに住んでいたヒロレ・モハメドを訪ね、代わりにスルターンになるよう要請したという。当時、ある男性が女性を襲うという事件が起こった。しかし、スルターンのアデン・ハッサンはうまくこの問題に対処できなかった。そして、ヒロレ・モハメドはその男性を逮捕して裁きを与えたことによって人々から指導者として認められ、スルターンに推挙されたとされる。紛争の処理はスルターンに期待される役回りのひとつであり、彼は事件を首尾よく解決に導くことでその力量を示したということである。また、ヒロレ・モハメドはスルターンに就任するとガリッサに定住したという。ハッサン・ワルファヤアデン・ハッサンの時代には、スルターンは一定の場所に留まらず、つねに居所を移していた。彼はガリッサを拠点とすることで同地に県庁を置いていた行政当局とのチャンネルを確保するとともに、アウリハン内で問題が起こるとあるアカシアの木の下で人々の話に耳を傾けたと言われる⁹⁰⁾。

これらの語りの細部には検討の余地があ

る。たとえば、ヒロレ・モハメドがモヤレの国境警備隊で勤務していたのは事実だが、アデン・ハッサンの在位の末期にはすでにその職を離れ、ベナネを拠点としていたはずだ。とはいえ、少なくとも彼が境界線の守護者として、ひいては間接統治のエージェントとして権威を強めていったという大枠の筋書きについては、行政文書の記述とも一致する。通常、ケニア北東部の行政官はサブクラン以下のレベルの政治に踏み込んで関心を払うことがなかったため、そのことがアウリハン内の政治的な動態にどのような影響を与えたのかが記録され、文字に残されることはなかった。そして、境界線の設定をめぐる人々の記憶はこの点に光を当てる資料として解釈できるのではないだろうか。

第3章で述べたように、ソマリは19世紀の後半からおもにサブクランの単位でアフリカの角の南部で移動を開始し、現在のケニア北東部にたどり着いた。アウリハンの移住はその広域的なプロセスの一端をなしていた。彼らの社会は移住前から確固たる凝縮性を備えていたわけではなかったものの、ケニアへの西進と植民地政府による軍事平定を経てさらにまとまりが失われ、ジュバランドのセクションとの分裂が進んでいった。アウリハンをはかの集団から隔てる境界線も、イタリア領とのあいだに引かれた国境線も、たしかに外部から押し付けられた制度であり、彼らから自由に移動する力能を奪うための装置だった。しかし、実態としてはそれによって越境的な移動性が完全にコントロールされることはなく、当局も部分的にこの状態を追認せざるを得なかった。以上を踏まえると、社会的現象としての境界線にとってはそれがどの程度実効的に機能したのかよりも、ヒロレ・モハメドを蝶番としてアウリハンの内外に対して境界線について合意が結ばれたという出来

89) インタビュー（アブディ・シーク・アドゥ、モドガシ、2010年10月18日；マフムード・マーリム、モドガシ、2010年10月20日）。

90) インタビュー（マフムード・マーリム、モドガシ、2010年10月23日）。

事のほうが重要だったのではないかと考えられる。というのも、このケースに限らずアフリカのいわゆる「国家をもたない社会」では、合意こそが統治者の被統治者に対する政治的支配の基盤をなしてきたからである（フォーテス・エヴァンス＝プリッチャード 1972）。

現在でもアウリハンの内実は一枚岩ではない。たとえば、ケニアへの移住以前から主流派のセクションから距離をとる傾向があったアフガブは、依然として独立的な集団だと語られる。また、アフワはラクダ牧畜を中心とするその他のセクションとは異なり、おもにウシを飼育しており、文化的な隔りがあるという。彼らがラクダに用いる焼印の模様は、本来はウシに施すものである。ほかのセクションの成員は、日常的な会話のなかでときにアフワとの異質性を強調する。他方で、アウリハンはひとつの集団として内外から認識されているのも事実である。ほかのサブクランのあいだに土地をめぐる衝突が起こると、彼らは共同でみずからの利益を確保するために立ち上がらなければならない。また、その結果死傷者が生じると、たとえその者のセクションとの関係が普段は親密でなくとも同じアウリハンの一員として血償の支払いを要求し、受けとる義務を負う。日常的にこのような集合性が意識にのぼることはないが、その外延は決して自明の状態ではない。それは、ジュバ川右岸のセクションとの分離を経験したのちに、ヒロレ・モハメドというスルターンの権威のもとでヘールについて合意し、その後も社会生活のなかでそれを再確認するうちに形成されてきたものである。それが遠心力をともなう強権的なプロセスだったことは、彼の支配に反発した一部のセクションがそのもとを離れ、イタリア領側に逃れたことから伺うことができる⁹¹⁾。ヘールとしての境界線は、そのような政治的出来事として解釈できるのだ。

6 結論

本稿ではここまで、ソマリのアウリハンというサブクランを対象としてケニア北東部の行政境界線をめぐる植民地政治を検討してきた。以下の結論では、植民地国家とアウリハンの双方にとって境界線の設定がどのような出来事だったのかを考察する。

1.1 でまとめたように、東アフリカの牧民研究では境界線は「文化的、政治的空間の縮減」を促進するための装置という側面から論じられてきた。この議論は近代国家の領域性に関する標準的な理解と軌を一にしており、植民地期のケニア北東部でもそうした政策的な意図は確かに認められた。とはいえ、国境が実際にそのような役割を十全に果たすことがなかったことは、オーバによって指摘されている（Oba 2013, 2017: 251-274）。それは国内の行政境界線についても同様であり、本稿ではアウリハンを事例に人間や家畜などのモノの越境的な流動性が妨げられなかったことを明らかにした。

それでは、ケニア北東部において国家は境界線を通じてどのような存在として立ち現れたのだろうか。この種の議論でしばしば強調されるのが、近代国家の脆弱性の側面である。すなわち、主権領域内の土地と住民を管理しやすいうように境界線で区切り、読解可能にし、秩序だった状態へと再編するというハイモダンな統治理性によって近代国家を特徴づけるとともに（Scott 1998）、その不徹底や失敗の原因を、辺境におけるリソースの不足や実行能力の欠如に求めるのだ。たしかに、本稿でも示した通り、ケニアの中央政府は北東部で境界線を実効的に運用するための人員や予算を配分せず、法的な制度も整備しなかった。この地域では原住民居留地が設置されないなど、その他の地域で試みられた標準的な支配の形態が事実上放棄された。ここでは特

91) KNA/PC/NFD 2/3/1, 'Garissa District Handing Over Report, 1937'.

別県（行政）令などの強権的な法令が適用されたものの、境界線の厳格な管理にプライオリティが置かれることはなく、非常に強力な行政権と司法権を託された地方行政官は何よりも治安と秩序の維持に専心していた。

以上を踏まえると、ホプキンスが指摘するように、北東部をある種の「例外状態」（アガンベン 2007）として、すなわち国家の執行権力が肥大化した状態として捉える議論はたしかに説得的に見える（Hopkins 2020: 7）。しかし、このように特定の地域で立ち現れる国家権力をその強度の程度によって説明する議論には、問題が残る。というのも、それでは本稿でたどったような境界線をめぐるローカルで複雑な政治の展開を説明できないからだ。そこで、本稿ではその多様な展開の一端を明らかにするために、アウリハンを事例として行政境界線が設定されるプロセスを検討し、それがこの地域の個々の生態的、社会的、行政的な環境を反映していたことを示した。彼らがイタリアではなくイギリスの政府の管轄下に置かれたこと、そしてロリアン湿地の南側のエリアで領域化されたことは、20世紀初頭の複雑で偶発的な政治的折衝の結果であった。また、結果的には想定通りにはいかなかったものの、彼らと別のサブクランのあいだの混淆状態すら国家の不在と同義ではなく、行政当局が現場で生み出した介入のひとつの様式にほかならなかった。このことは、境界線を舞台とした植民地政治が相当の広がりを持っていたことを物語っている。

この点について考察を深めるうえで示唆に富んでいるのが、1.1 で言及したホプキンスの辺境統治性に関する議論である（Hopkins 2020）。この理論的な視座は、境界線をめぐる植民地政治について生産的な議論の切り口を与えてくれる。上で述べたように、北東部では人間の移動と居住のコントロールという点で特異的な統治実践がおこなわれていた。この地域を辺境統治性の空間として捉えなおすことによって、それを逸脱や例外ではなく

同時代の帝國的な状況と関連づけながら検討することが可能になる。現に、本稿の第5章で述べたように、北部辺境県では1934年の特別県（行政）令に結実する、ケニアの他地域からは種別化される一連の施策がおこなわれたが、それはインドの北西辺境州の行政的、法的実践をモデルとしていた（Hopkins 2020: 78-84）。

辺境統治性の議論でもうひとつ目を向けるべきなのは、地方行政官の果たした役割である。彼らは統治機構の末端を構成する「現場の人間（man on the spot）」で、アフリカの多くの植民地では地方行政の遂行に当たって幅広い権限と裁量が付与されていた（Spear 2003）。その側面がとくに顕著だったのが辺境という場であり、ホプキンスは独自の構想や取り組みをもたらした現地の行政官、軍人、エージェントのイニシアティブを強調している。そして、それらの人物は行政境界線の管理のあり方を大きく左右する存在でもあった。一般的に、近代の国境が国家間の協定のもとで定められるのとは対照的に、国内の境界線は行政的な有用性の論理によって基礎づけられる。後者は前者と異なり固定化されておらず、行政上の都合で変更されるのも珍しくない。そのため、辺境地域では境界線は現場の行政官の裁量によって柔軟に運営され、その統治の強権性と人格性を反映していた。しかし、他方で任地における彼らの立場と威信はしばしば絶対的なものではなく、ローカルな社会関係に埋め込まれており、境界線もその文脈のなかで引かれた。本稿ではアウリハンを対象にキッターマスター、ホープ、ルウェリンといった行政官が集団の移住と領域化を主導したことを指摘したが、その帰結はともかく過程については例外的なケースではなかったというわけだ。したがって、本稿の議論は辺境における領域性をめぐる複雑な植民地行政の一端を分析したのものとして位置づけることが可能である。さらに、アウリハンの事例を辺境に暮らすその他の民族やクラン

がどのように行政境界線によって区切られたのかと比較することによって、辺境統治性の地域的な多様性に光を当てることができるだろう。

では、以上の経過はアウリハンの、ひいてはソマリの牧畜民の視点に立つとどのような意味を持ったと言えるだろうか。本稿ではこの点を検討するため、迂遠なようだがそもそも彼らは行政境界線が導入されるまでどのように移動していたのかを、植民地化以前からの長期的な時間軸で整理した。ケニア北東部の乾燥地が数百年にわたってラクダ飼育を核とする生業牧畜が営まれてきた、移動性の高い空間だったことは、第2章で述べた通りである。その後、19世紀以降ソマリがこの地域に浸透した展開について、初期の先行研究では12世紀頃から漸進的に進められた、アフリカの角全体の広域的な南進の最終局面として解釈されてきた。しかし、歴史学、歴史言語学、社会・文化人類学の諸分野で蓄積されてきた知見を踏まえると、この説は現在では妥当性を欠くと評価される。第3章で論じたように、ジュバ川以西のソマリの拡大はオロモを中心とした政治力学の衰退、民族間関係の再編、広域経済との接続、イスラームの浸透など、政治的、経済的、社会的、宗教的な要因を背景とする複雑なプロセスだったのであり、アウリハンのケースもその一端として位置づけられなければならないのだ。

このプロセスとイギリスによる植民地支配の関係には、二面性が認められた。つまり、植民地当局はソマリの移動性の高さを警戒し、抑え込もうとしたのだが、そもそも彼らの移動を促進したのは当局によるジュバ川右岸の内陸部への支配の拡大だった。また、第4章ではソマリによる大規模な南進が一定の方向性を共有しながらも統一的な歴史のプロセスを構成していなかったこと、それはむしろ放牧資源の布置、家畜群の構成、集団間の関係、当局による行政的介入によって左右されるミクロな移動の総体だったことを具体的

に示した。アウリハンがロリアン湿地の南部に定着したのは、そのひとつの帰結であった。

上述の通り、境界線を通じたコントロールという当局の目論見が十分なかたちで実を結ぶことはなく、北東部は社会的、経済的、宗教的な意味で流動的な空間であり続けた。しかし、だからといって境界線の設定が彼らの生活と無関係だったわけではない。本稿でアウリハンを事例として示したように、ソマリの人々はしばしば辺境における統治の脆弱性を利用して、行政境界線のあり方をめぐって地方当局と駆け引きを繰り返した。その結果、当局とのあいだで合意された境界線は多孔性を維持し、遊牧という生業様式に根ざした「空間の縮減」には直接つながらなかった。それは一見して些末な出来事のようにだが、アウリハンのケースからは以下の二つを重要な点として指摘できる。第一に、放牧資源の利用を正当化する論理が複雑になった。ほかの多くの牧畜民と同様に、植民地化以前のソマリ社会では水場や放牧地へのアクセスは集団の軍事力のみによって保証されていた(Lewis 1961: 31-55)。彼らが植民地権力のもとで領域化を受け入れたことによって、この状況に変化が見られた。依然として力の論理が優先されたが、それと同時に、当局が放牧資源をどの集団のテリトリー内に位置づけているのかも正当性の根拠となったのだ。

より重要なのは次の点である。すなわち、境界線は彼らに政治的な再編をもたらす契機となった。アフリカの角の南部で「分割」が達成された結果、アウリハンのテリトリーはイギリスとイタリアという二つの主権領域に分断された。アウリハンの中心地から離れていた前者のケニア側では、軍事平定を経て弱体化し、四散していたセクションをまとめる必要があった。筆者が収集した口述資料は人々がヒロレ・モハメドというスルターンの権威のもとでアウリハンとしての集合性を回復しようとしたこと、そして境界線は社会的な結合をもたらすハールのひとつだったこと

を示している。さらに言うと、この過程は国家権力が脆弱な空間で展開したもののだが、それと同時に辺境統治性に依拠した行政の社会的な帰結のひとつとして解釈されるべきものだろう。

参考資料

●未刊行史料●

BA : Bristol Archives
BL : The British Library
BOD : Bodleian Library, Oxford University
KNA : The Kenya National Archives
NAUK : The National Archives of the United Kingdom

●参考文献●

アガンベン, ジョルジョ 2007 『例外状態』上村忠男・中村勝己訳, 未来社.
河合香吏 2004 「ドドスにおける家畜の略奪と隣接集団間の関係」田中二郎他編『遊動民—アフリカの原野に生きる』, 542–566, 昭和堂.
佐川徹 2009 「東アフリカ牧畜社会における横断的紐帯の持続」『アジア・アフリカ言語文化研究』78: 131–163.
内藤直樹 2012 「東アフリカ牧畜社会における政治的民主化と民族間関係の動態—北ケニア牧畜民アリアルが経験した地方分権化と国会議員選挙の事例から」『国立民族学博物館研究報告』34(4): 681–721.
フォーテス, マイヤー・エヴァンス=ブリッチャード, エドワード編 1972 『アフリカの伝統的政治体系』大森元吉他訳, みすず書房.
水野祥子 2019 『エコロジーの世紀と植民地科学者—イギリス帝国・開発・環境』名古屋大学出版会.
Abbinck, Jon. 1997. “The Shrinking Cultural and Political Space of East African Pastoral Societies.” *Nordic Journal of African Studies*, 6(1): 1–17.
Ali, Mohamed Nuuh. 1985. *History in the Horn of Africa, 1000 B.C.–1500 A.D.: Aspects of Social and Economic Change between the Rift Valley and the Indian Ocean*. Ph.D. dissertation, University of California, Los Angeles.
Alpers, Edward. 2009. *East Africa and the Indian Ocean*. Princeton: Markus Wiener Publishers.
Arkell-Hardwick, Alfred. 1903. *An Ivory Trader in North Kenya: An Ivory Trader in North Kenya: The Record of an Expedition Through Kikuyu to*

Galla-Land in East Equatorial Africa. London: Longmans, Green and Co.
Asad, Talal. 1970. *The Kababish Arabs: Power, Authority and Consent in a Nomadic Tribe*. London: Hurst and Company.
Asiwaju, Anthony ed. 1985. *Partitioned Africans: Ethnic Relations across Africa's International Boundaries, 1884–1984*. London: Hurst and Company.
Berntsen, John. 1979. *Pastoralism, Raiding, and Prophets: Maasailand in the Nineteenth Century*. Ph.D. dissertation, The University of Wisconsin-Madison.
Berry, Sarah. 1992. “Hegemony on a Shoestring: Indirect Rule and Access to Agricultural Land.” *Africa*, 62(3): 327–355.
Besteman, Catherine. 2016. *Making Refuge: Somali Bantu Refugees and Lewiston, Maine*. Durham: Duke University Press.
Broun, W. 1906. “A Journey to the Lorian Swamp, British East Africa.” *The Geographical Journal*, 27(1): 36–51.
Bruzone, Anna. 2019. *Territorial Appropriation, Trade, and Politics in the Somalia-Kenya Borderlands (c.1925–1963): State Formation in Transnational Perspective*. Ph.D. dissertation, The University of Warwick.
Bulliet, Richard. 1975. *The Camel and the Wheel*. Cambridge: Harvard University Press.
Cashmore, T. H. R. 1965. *Studies in District Administration in the East Africa Protectorate 1895–1918*. Ph.D. dissertation, University of Cambridge.
Cassanelli, Lee. 1982. *The Shaping of Somali Society: Reconstructing the History of a Pastoral People, 1600–1900*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
———. 2009. “The Partition of Knowledge in Somali Studies: Reflections on Somalia's Fragmented Intellectual Heritage.” *Bildhaan: An International Journal of Somali Studies*, 9: 4–17.
Chew, Emrys. 2012. *Arming the Periphery: The Arms Trade in the Indian Ocean during the Age of Global Empire*. New York: Palgrave Macmillan.
Coldham, Simon. 1978. “Land Control in Kenya.” *Journal of African Law*, 22: 63–77.
Cormack, Zoe. 2016. “Borders are Galaxies: Interpreting Contestations over Local Administrative Boundaries in South Sudan.” *Africa*, 86(3): 504–527.
Dalleo, Peter. 1975. *Trade and Pastoralism: Economic Factors in the History of the Somali of Northeastern Kenya, 1892–1948*. Ph.D.

- dissertation, Syracuse University.
- . 1979. “The Somali Role in Organized Poaching in Northeastern Kenya, c. 1909–1939.” *The International Journal of African Historical Studies*, 12(3): 472–482.
- de Vere Allen, James. 1993. *Swahili Origins: Swahili Culture and the Shungwaya Phenomenon*. London: James Currey.
- Donaldson-Smith, Arthur. 1897. *Through Unknown African Countries: The First Expedition from Somaliland to Lake Lamu*. London: Edward Arnold.
- Dracopoli, Ignatius. 1914. *Through Jubaland to the Lorian Swamp: An Adventurous Journey of Exploration and Sport in the Unknown African Forests and Deserts of Jubaland to the Unexplored Lorian Swamp*. London: Seeley, Service and Co.
- Dutton, E. 1944. *Lilibullero or the Golden Road*. Zanzibar: Printed Privately.
- Ehret, Christopher. 1974. *Ethiopians and East Africans: The Problem of Contacts*. Nairobi: East African Publishing House.
- . 1995. “The Eastern Horn of Africa, 1000 B.C. to 1400 A.D.: The Historical Roots.” *The Invention of Somalia* (Ali Jimale Ahmed ed.), 233–262, Lawrenceville: The Red Sea Press.
- El-Safi, Mahassin Abdel Gadir Hag. 1972. *The Somalis in the East Africa Protectorate and Kenya Colony 1895–1963*. Ph.D. dissertation, The University of Edinburgh.
- Ensminger, Jean. 1992. *Making a Market: The Institutional Transformation of an African Society*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fallers, Lloyd. 1969. *Law Without Precedent: Legal Ideas in Action in the Courts of Colonial Busoga*. Chicago: The University of Chicago Press.
- FAO. 2017. *GIEWS Update - Ethiopia: Severe Food Insecurity in Southern Somali Region Due to Prolonged Drought*. Rome: FAO.
- Fischer, G. 1887. “Über Die Jetzigen Verhältnisse Im Südlichen Galla-Lande Und Wito.” *Mitteilungen der Geographischen in Hamburg*, 1: 347–362.
- Fleming, H. 1964. “Baiso and Rendille: Somali Outliers.” *Rassegna di Studi Ethiopici*, 20: 35–96.
- Fratkin, Elliot. 1991. *Surviving Drought and Development: Ariaal Pastoralists of Northern Kenya*. Boulder: Westview Press.
- French, C. N. 1913. “A Journey from the River Juba by Dolo, Moyale, and Mount Marsabit to the Uaso Nyiro.” *The Geographical Journal*, 42(5): 430–435.
- Galaty, John. 2016. “Boundary-Making and Pastoral Conflict along the Kenyan–Ethiopian Borderlands.” *African Studies Review*, 59(1): 97–122.
- Gifford-Gonzalez, Diane. 2003. “The Fauna from Ele Bor: Evidence for the Persistence of Foragers into the Later Holocene of Arid North Kenya.” *African Archaeological Review*, 20(2): 81–119.
- Haywood, C. W. 1913. “The Lorian Swamp.” *The Geographical Journal*, 41(5): 463–468.
- Heine, Bernd. 1978. “The Sam Languages: A History of Rendille, Boni and Somali.” *Afroasiatic Linguistics*, 6(2): 23–115.
- Helander, Bernhard. 2003. *The Slaughtered Camel: Coping with Fictitious Descent among the Hubeer of Southern Somalia*. Uppsala: Acta Universitatis Upsaliensis.
- Hersi, Ali Abdurahman. 1977. *The Arab Factor in Somali History: The Origins and the Development of Arab Enterprise and Cultural Influences in the Somali Peninsula*. Ph.D. dissertation, University of California, Los Angeles.
- Hess, Robert. 1966. *Italian Colonialism in Somalia*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hobley, Charles. 1894. “People, Places, and Prospects in British East Africa.” *The Geographical Journal*, 4(2): 97–123.
- Hodge, Joseph, Gerald Hödl and Martina Kopf eds. 2014. *Developing Africa: Concepts and Practices in Twentieth-Century Colonialism*. Manchester: Manchester University Press.
- Höhne, Markus. 2007. “From Pastoral to State Politics: Traditional Authorities in Northern Somalia.” *State Recognition and Democratization in Sub-Saharan Africa: A New Dawn for Traditional Authorities?* (Lars Buur and Helene Maria Kyed, eds.), 155–182, New York: Palgrave Macmillan.
- Hopkins, Benjamin. 2020. *Ruling the Savage Periphery: Frontier Governance and the Making of the Modern State*. Cambridge: Harvard University Press.
- James, Frank. 1888. *The Unknown Horn of Africa: An Exploration from Berbera to the Leopard River*. London: George Philip and Son.
- Johnson, Douglas. 1982. “Tribal Boundaries and Border Wars: Nuer-Dinka Relations in the Sobat and Zaraf Valleys, c. 1860–1976.” *Journal of African History*, 23(2): 183–203.
- Kapteijns, Lidwein. 2004–2010. “I. M. Lewis and Somali Clanship A Critique.” *Northeast African Studies*, 11(1): 1–23.
- King, L. N. 1928. “The Work of the Jubaland

- Boundary Commission.” *The Geographical Journal*, 72(5): 420–435.
- Kotrba, Franz. 2008. *William Astor Chanler (1867–1934) und Ludwig von Höhnel (1857–1942) und Afrika*. Diplomarbeit, Universität Wien.
- Lane, Paul. 2011. “An Outline of the Later Holocene Archaeology and Precolonial History of the Ewaso Basin, Kenya.” *Smithsonian Contributions to Zoology*, 632: 11–30.
- Lawrance, Benjamin, Emily Osborn and Richard Roberts eds. 2006. *Intermediaries, Interpreters, and Clerks. African Employees in the Making of Colonial Africa*. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Lewis, Herbert. 1966. “The Origins of the Galla and Somali.” *The Journal of African History*, 7(1): 27–46.
- Lewis, Ioan. 1960. “The Somali Conquest of the Horn of Africa.” *Journal of African History*, 1(2): 213–229.
- . 1961. *A Pastoral Democracy: A Study of Pastoralism and Politics among the Northern Somali of the Horn of Africa*. London: Oxford University Press.
- . 1994. *Blood and Bone: The Call of Kinship in Somali Society*. Lawrenceville: Red Sea Press.
- Marshall, Fiona. 2000. “The Origins of Domesticated Animals in Eastern Africa.” *The Origins and Development of African Livestock: Archaeology, Genetics, Linguistics, and Ethnography* (Roger Blench and Kevin MacDonald, eds.), 191–221, London: University College London Press.
- Marshall, Fiona and Elisabeth Hildebrand. 2002. “Cattle Before Crops: The Beginnings of Food Production in Africa.” *Journal of World Prehistory*, 16(2): 99–143.
- Menkhaus, Kenneth. 1989. *Rural Transformation and the Roots of Underdevelopment in Somalia's Lower Jubba Valley*. Ph.D. dissertation, University of South Carolina.
- Merryman, James. 1984. *Ecological Stress and Adaptive Response: The Kenya Somali in the Twentieth Century*. Ph.D. dissertation, Northwestern University.
- Nugent, Paul. 2002. *Smugglers, Secessionists and Loyal Citizens on the Ghana-Togo Frontier: The Lie of the Borderlands since 1914*. Athens: Ohio University Press.
- Oba, Gufu. 2013. *Nomads in the Shadows of Empires: Contests, Conflicts and Legacies on the Southern Ethiopian-Northern Frontier*. Leiden: Brill.
- . 2017. *Herder Warfare in East Africa: A Social and Spatial History*. Cambridgeshire: The White Horse Press.
- Phillipson, David. 1984. “Aspects of Early Food Production in Northern Kenya.” *Origin and Early Development of Food-Producing Cultures in North-Eastern Africa* (L. Krzyżaniak and M. Kobusiewicz, eds.), 489–495, Poznań: Muzeum Archeologiczne w Poznaniu.
- Pratt, D. J., P. J. Greenway and M. D. Gwynne. 1966. “A Classification of East African Rangeland, with an Appendix on Terminology.” *Journal of Applied Ecology*, 3(2): 369–382.
- Reece, Scott. 2008. *Renewers of the Age: Holy Men and Social Discourse in Colonial Benaadir*. Leiden: Brill.
- Robinson, Paul. 1985. *Gabba Nomadic Pastoralism in Nineteenth and Twentieth Century Northern Kenya: Strategies for Survival in a Marginal Environment*. Ph.D. dissertation, Northwestern University.
- Salkeld, R. 1915. “A Journey across Jubaland.” *The Geographical Journal*, 46(1): 51–54.
- Samatar, Said. 1982. *Oral Poetry and Somali Nationalism: The Case of Sayid Mahammad 'Abdille Hasan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schlee, Günther. 1989. *Identities on the Move: Clanship and Pastoralism in Northern Kenya*. Manchester: Manchester University Press.
- . 2010. *Territorialising Ethnicity: The Political Ecology of Pastoralism in Northern Kenya and Southern Ethiopia*. Halle: Max-Planck-Gesellschaft.
- Scott, James. 1998. *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*. New Haven: Yale University Press.
- Simpson, George. 1994. *On the Frontiers of Empire: British Administration in Kenya's Northern Frontier District, 1905–1935*. Ph.D. dissertation, West Virginia University.
- . 1999. “British Perspectives on Aulihan Somali Unrest in the East Africa Protectorate, 1915–18.” *Northeast African Studies*, 6(1-2): 7–43.
- Sobania, Neal. 1980. *The Historical Tradition of the Peoples of the Eastern Lake Turkana Basin c.1840–1925*. Ph.D. dissertation, University of London.
- Spear, Thomas. 2003. “Neo-Traditionalism and the Limits of Invention in British Colonial Africa.” *Journal of African History*, 44: 3–27.
- Spencer, Paul. 1973. *Nomads in Alliance: Symbiosis and growth among the Rendille and Samburu of Kenya*. London: Oxford University Press.
- Stiles, Daniel. 1981. “Hunters of the Northern

- East African Coast: Origins and Historical Processes.” *Africa*, 51(4): 848–862.
- Survey of Kenya. 1986. *Kenya: Provinces and Districts Map*. Nairobi: Survey of Kenya.
- Swarzenski, Wolfgang and Maurice Mundorff. 1977. *Geohydrology of North Eastern Province, Kenya*. Washington: United States Government Printing Office.
- Swayne, H. G. C. 1895. *Seventeen Trips through Somáland: A Record of Exploration and Big Game Shooting, 1885 to 1893*. London: Rowland Ward and Co.
- Thomas, S. 1917. *Jubaland and the Northern Frontier District*. Nairobi: Uganda Railway Press.
- Tignor, Robert. 1971. “Colonial Chiefs in Chiefless Societies.” *The Journal of Modern African Studies*, 9(3): 339–359.
- Turton, E. R. 1969. “The Impact of Mohammad Abdille Hassan in the East Africa Protectorate.” *The Journal of African History*, 10(4): 641–657.
- . 1970a. *The Pastoral Tribes of Northern Kenya 1800–1916*. Ph.D. dissertation, University of London.
- . 1970b. “Kirk and the Egyptian Invasion of East Africa in 1875: A Reassessment.” *The Journal of African History*, 11(3): 355–370.
- . 1975. “Bantu, Galla and Somali Migrations in the Horn of Africa: A Reassessment of the Juba/Tana Area.” *Journal of African History*, 16(4): 519–537.
- Vaughan, Christopher. 2013. “Violence and Regulation in the Darfur-Chad Borderland c. 1909–56: Policing a Colonial Boundary.” *Journal of African History*, 54(2): 177–198.
- Vaughan, Christopher, Mareike Schomerus and Lotje Vries eds. 2013. *The Borderlands of South Sudan: Authority and Identity in Contemporary and Historical Perspectives*. New York: Palgrave Macmillan.
- Waller, Richard. 1985. “Ecology, Migration, and Expansion in East Africa.” *African Affairs*, 84(336): 347–370.
- . 2012. “Pastoral Production in Colonial Kenya: Lessons from the Past.” *African Studies Review*, 55(2): 1–28.
- Weitzberg, Keren. 2017. *We Do Not Have Borders: Greater Somalia and the Predicaments of Belonging in Kenya*. Athens: Ohio University Press.
- White, Luise, Stephan Miescher and David William Cohen eds. 2001. *African Words, African Voices: Critical Practices in Oral History*. Bloomington: Indiana University Press.
- Ylvisaker, Marguerite. 1979. *Lamu in the Nineteenth Century: Land, Trade, and Politics*. Boston: Boston University.

採択決定日—2023年3月6日